

許免權版

禁電子式複写

明治十四年四月刊行

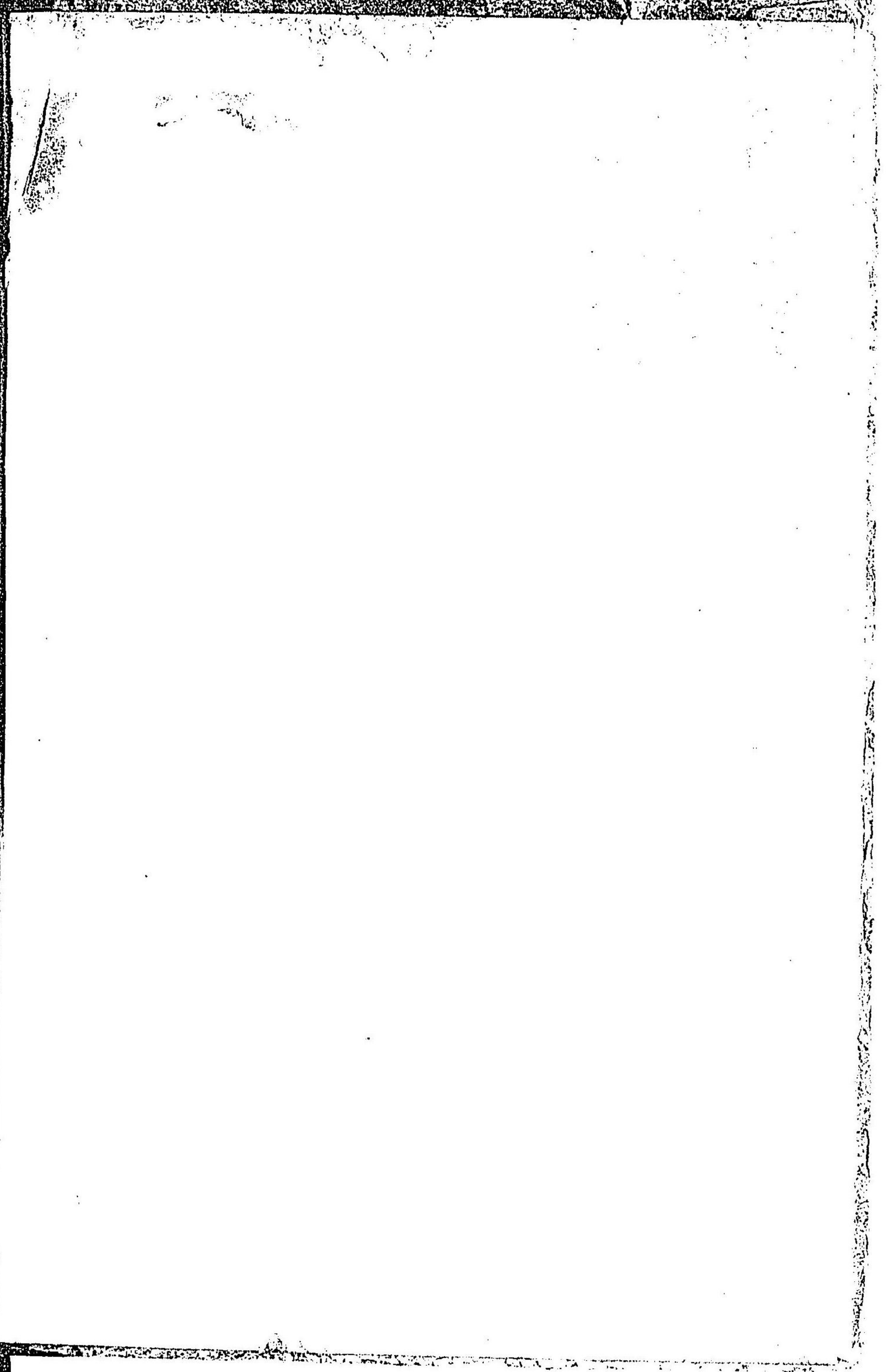
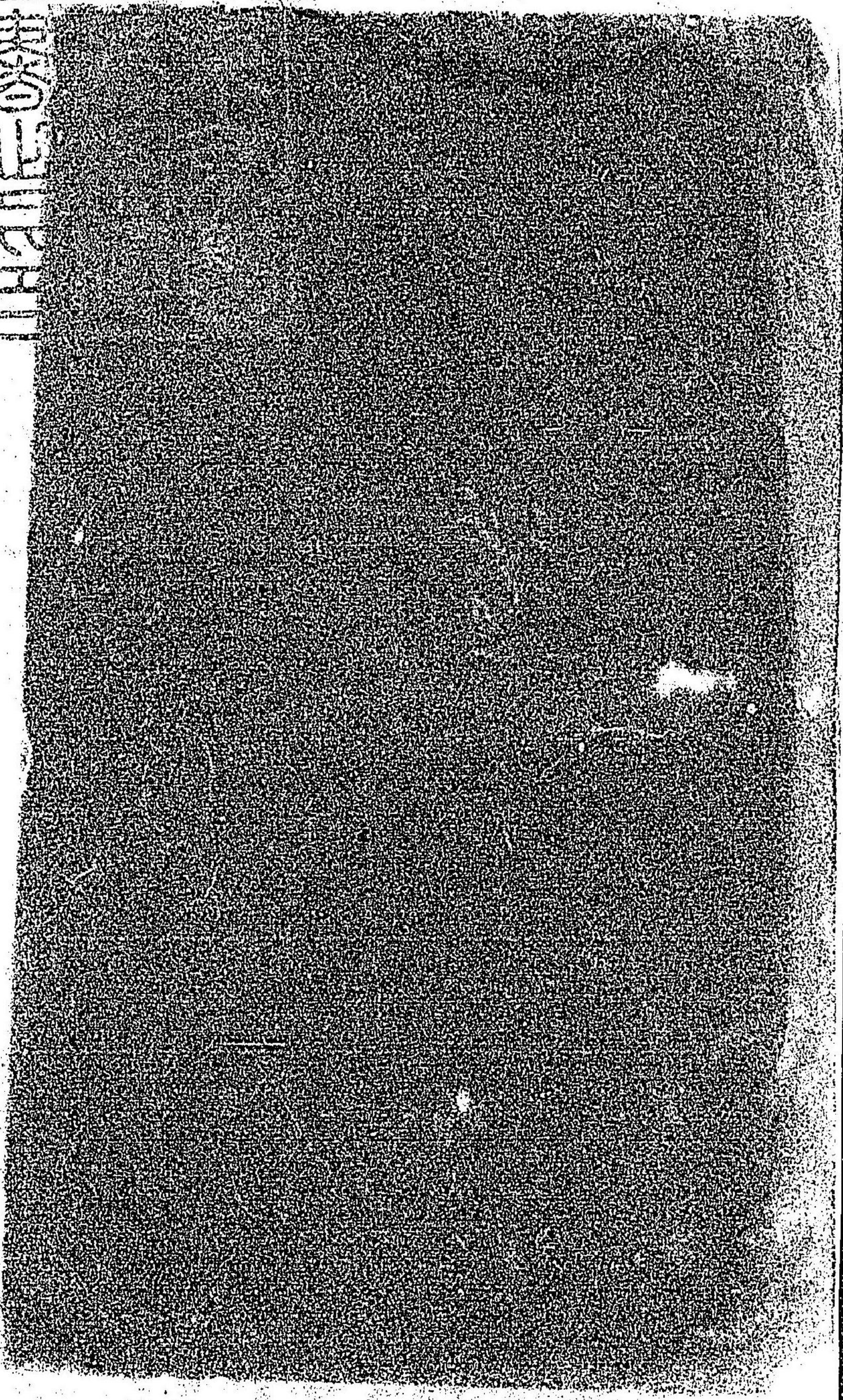
假名
傍訓

公布此寫

册三第

徇鐸社發兌

MANEOM



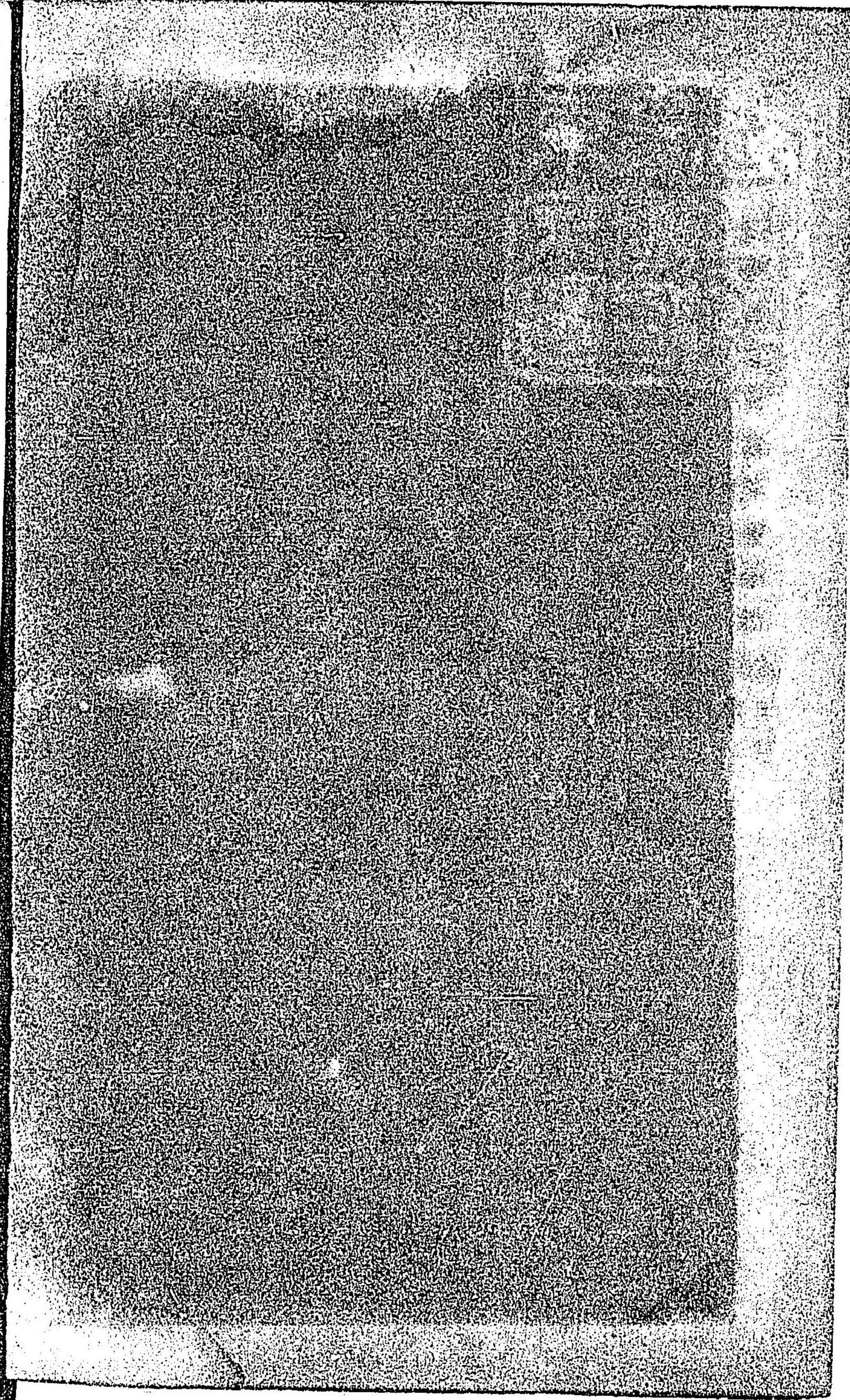
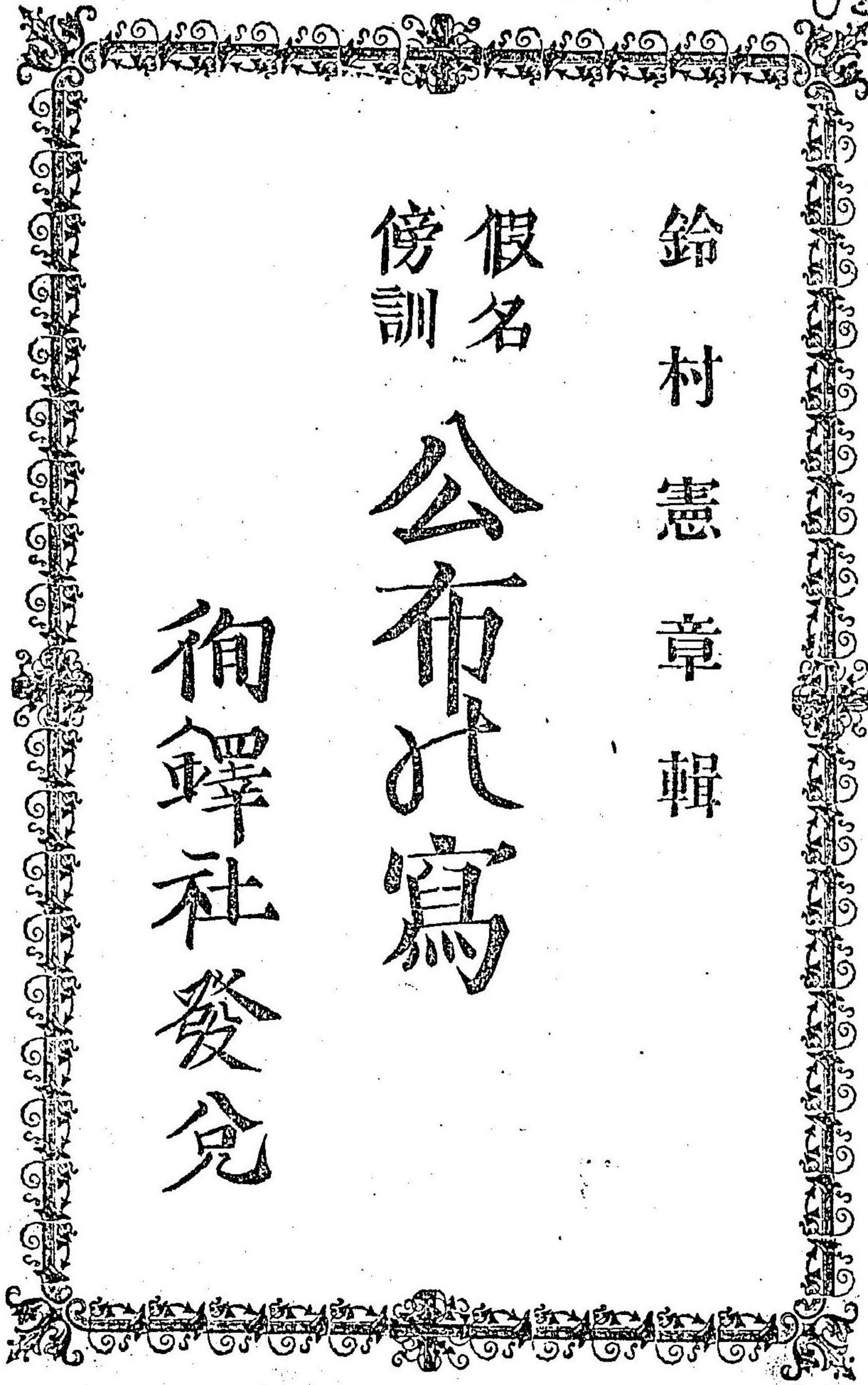
特印
267

鈴村憲章輯

假名
傍訓

公布此寫

徇鐸社發兌

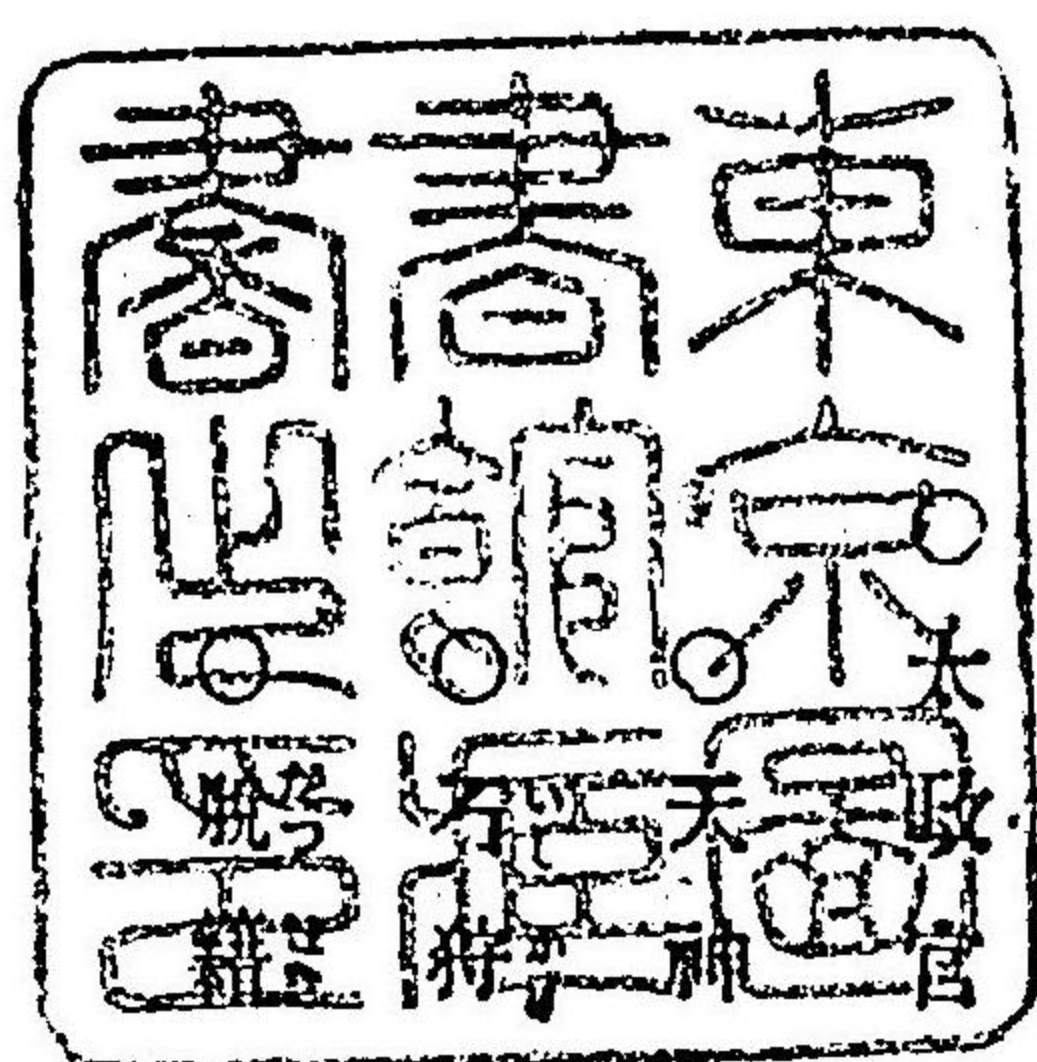


假名 公布 第三册 目次

明治三年 庚午 自正 至十二月

○ 詔勅

- 治教宣布の詔並宣教使心得書 三月
- 天神地祇八神及皇靈御鎮祭の詔 三月



地祇八神皇靈御鎮座位被定 四月
 後志釧路國此内管轄替 八月
 の徒復籍處分方 九月

一 丁
 六 丁
 六 丁
 七 丁
 八 丁

- 同上よ付東京府へ被_レ達 九正月 八丁
- 留守官士卒京都府へ被_レ属 九正月 九丁
- 京都學校留守官へ被_レ属 九正月 九丁
- 大森縣濱田縣と改稱 九正月 十丁
- 京都警備の藩兵兵部省へ被_レ属 九正月 十丁
- 御歌會始よ付詠進日限 九正月 十丁
- 後志國膽振國の内松平氏被_レ属 十正月 十一丁
- 陣笠堤燈御印被_レ定 十二正月 十一丁
- 朱座年寄等受領地被_レ廢 十二正月 十五丁
- 節朔參賀刻限 十二正月 十五丁

- 軍神祭祝砲被_レ行 十三正月 十五丁
- 異宗徒名古屋藩へ被_レ付 十三正月 十六丁
- 佛國軍艦内海測量被_レ許 十七正月 十七丁
- 桃園帝外三帝御祭日被_レ定 十八正月 十七丁
- 外國航海出願規則被_レ定 十九正月 十八丁
- 仁孝廿五年祭御神事 廿三正月 二十丁
- 御近火號鐘被_レ定 廿四正月 二十丁
- 郵便商船規則被_レ定 廿七正月 二十丁
- 浮浪の徒動搖よ付鐵橋方 廿八正月 二十二丁
- 祈年祭被_レ行 廿九正月 二十三丁

四

- 除服出仕宣下心得廿九日 二十三丁
- 西班牙條約御取結廿九日 二十四丁
- 財産没籍法被停月正 二十四丁
- 容藏凶荒官祿獻納の分御恤救月正 二十五丁
- 關八州川筋役賃金諸税割増納方月正 二十六丁
- 兵部省中造兵司被置二月 二十七丁
- 後志國此内管轄替二月 二十七丁
- 諸願伺届宛所認方三月 二十七丁
- 出火の節馬上近傍へ乗込被禁三月 二十八丁
- 府藩縣公解と何府藩縣と改稱三月 二十八丁

五

- 西班牙國使節參朝三月 二十八丁
- 京都兵部省被廢戌兵同府へ被属三月 二十八丁
- 華族齒染眉掃被禁五月 二十八丁
- 列藩華族隱居有位の輩朝觀五月 二十九丁
- 京都藩邸宅地處分方五月 二十九丁
- 於本丸跡練兵天覽七月 三十丁
- 京坂華士族宅地管轄方八月 三十丁
- 奉幣祭御再興式目取調九月 卅一丁
- 天文曆道大學へ管籍十二月 卅二丁
- 府藩縣印鑑彫刻十二月 卅三丁

六

- 樺太地方開拓使へ管轄 二十三日 卅三丁
- 西京へ還幸御延引 二十三日 卅四丁
- 開港所税額取締方 二十五日 卅五丁
- 若松縣巡察按察使管轄 二十日 四十三丁
- 仁和寺宮東伏見宮と改稱 二十日 四十三丁
- 書籍新刻免許取扱所轄 二十二日 四十四丁
- 府藩縣外債を被禁 二十二日 四十四丁
- 紅葉山文庫大史局へ被属 二十二日 四十五丁
- 相模國津久井縣を郡と改稱 二十七日 四十六丁
- 大和國へ五條縣を被置 二十七日 四十六丁

七

- 官員并諸藩家士等へ係る公事呼出方 二十七日 四十七丁
- 諸官員進退届出方 二十七日 四十七丁
- 洛中地子免除 二十七日 四十八丁
- 大坂醫學校病院大學所轄 二十八日 四十八丁
- 加茂社始臨時祭の稱被止 二十八日 四十九丁
- 馬車取締方 二十八日 五十丁
- 彈例當分被止 二十八日 五十一丁
- 延喜式内外大小神社取調 二十九日 五十二丁
- 不開港場規則難船救助心得被定 二十九日 五十三丁
- 宮女用挑灯印被定 二十九日 六十七丁

- 宮華族其他の名目金貨附禁止再違晦二月 六十九丁
- 府縣職員錄差出方晦二月 六十九丁
- 展造二分金引換期後れの分引換方二月 八十七丁
- 神祇官行幸御神事四月 八十八丁
- 外櫻田外九門夜通行方五月 八十八丁
- 士卒祿制更定五月 八十九丁
- 諸御門警戎規律被定五月 九十丁
- 新潟縣被復七月 九十三丁
- 京都府民へ産業基金立金を賜ふ八月 九十四丁
- 驛遞法改正官吏旅行繼人足制限八月 九十四丁

- 官吏滿二年以上奉職者賜物被定三月 百十二丁
- 神武帝御祭典被行三月 百十四丁
- 函館會所開拓使へ被屬十二月 百十五丁
- 伊大利亞公使參朝三月 百十五丁
- 集議院開院諸藩議員召換四月 百十六丁
- 同上議員撰舉方四月 百十六丁
- 御紋附の品社寺へ寄附被禁七月 百十八丁
- 北海道石狩國へ開拓神鎮座祭被行七月 百十八丁
- 東京神奈川此間鐵道築造よ付測量七月 百十九丁
- 横須賀修船所設置諸船修履願方九月 百十九丁

十

- 駒場野練兵場よ被定 十九日 百十九丁
- 二條城留守官へ被属 廿二日 百二十二丁
- 御門鑑札改正 廿三日 百二十二丁
- 日月此錦旗徳川氏奉還採納 廿三日 百二十四丁
- 有位華族参朝の節心得 廿四日 百二十五丁
- 一橋田安兩氏兵隊兵部省へ被属 廿四日 百二十五丁
- 天台一宗比叡山管轄よ被定 百二十五丁
- 宮内省中内膳司被置 廿八日 百二十六丁
- 府藩縣宣教の者撰擧方 廿八日 百二十六丁
- 軍曹の輩其稱被廢東京府へ被属 廿九日 百二十六丁

十一

- 海軍所東京へ設置御決定 四日 百三十丁
- 宣教使を大中少博士と改稱 百卅一丁
- 開拓使監事を被置 五日 百卅一丁
- 御記録編輯よ付國事關係の書類差出方 五日 百卅二丁
- 同上よ付華族諸藩へ御沙汰 五日 百卅三丁
- 諸官員拜借邸宅任免の節心得 九日 百卅八丁
- 駒場野練兵天覽 十日 百卅八丁
- 諸藩隠居朝覲濟御暇歸邑 十日 百卅八丁
- 銅製大砲無用の分差出方被止 十二日 百卅八丁
- 諸官員褒賞取計方 十二日 百卅九丁

- 辟香間祇候乘輿乘馬の制 十四日 月 百卅九丁
- 獨乙公使九州四國筋諸港巡回 十四日 月 百四十丁
- 寺院參内諸願筋差出方 廿四日 月 百四十二丁
- 大學御臨幸 廿四日 月 百四十三丁
- 頒歴發免の制 廿四日 月 百四十四丁
- 府藩縣外債取調方 廿四日 月 百四十四丁
- 諸願伺往復書類干支記載方 廿三日 月 百四十八丁
- 種痘法普及注意方 廿三日 月 百四十八丁
- 貨幣偽造犯赦宥の制限 廿九日 月 百四十九丁
- 彈正臺大少巡察權官被置 廿九日 月 百四十九丁

- 諸驛川場免地々所附與廢止 七日 月 百五十五丁
- 諸邸宅内發砲被禁 七日 月 百五十六丁
- 親王華族の輩府藩縣學校修業條規 八日 月 百五十六丁
- 彈例更定 十五日 月 百五十八丁
- 静岡藩行速船獻納 十五日 月 百六十丁
- 陸軍國旗並諸旗章挑灯幕印被定 十五日 月 百六十丁
- 官省へ外國人傭入手續 十九日 月 百六十五丁
- 奏任官以下參内の節名刺差出方 廿五日 月 百六十五丁
- 士族の陪從三代以上以下の者御扶助賜方 廿五日 月 百六十六丁
- 戊辰役死傷の兵隊へ祭案慰勞金下賜 晦日 月 百七十八丁

- 彈劾改正ノ付既往小過失不問ニ被置月五 百八十丁
- 府藩縣監察掛探索心得月五 百八十一丁
- 國事順逆を誤リ咎已未決ノ者寬典處置八月六日 百八十二丁
- 東京長崎の間電線架設方六月十日 百八十三丁
- 英京博覽會出品願出方六月十三日 百八十九丁
- 東京竹橋外四門諸人通行被許六月十四日 百八十九丁
- 勅奏任官以下御近火の節心得六月十七日 百八十九丁
- 楠中將社造營ニ付寄附届方六月十七日 百九十丁
- 越後按察使被廢六月二十日 百九十丁
- 御近火の節下乗場以内供進規則六月廿二日 百九十丁

- 僧侶御禮獻上物被定六月廿二日 百九十一丁
- 伏見守口の間四驛人足増賃心得六月 百九十二丁
- 官員撰舉前任奉職中履歴取調方六月 百九十二丁
- 彈正尹以下官省へ誌所心得六月 百九十三丁
- 貨幣製造處決令七月二日 百九十六丁
- 各港方位深淺其他取調七月五日 百九十八丁
- 諸藩東京官私邸の制被定七月八日 百九十八丁
- 盛岡縣被置七月十日 百九十九丁
- 東京築地關門御用通行心得七月十日 百九十九丁
- 京大坂の間當分錢時相場被許七月十三日 百九十九丁

- 三帝御諡号被奉御祭典廿七日 二百丁
- 民政部へ地理庶務兩司被置廿二日 二百丁
- 通商司大藏省へ被属廿二日 二百丁
- 弘文淳仁仲泰三帝御諡號被奉廿二日 二百一丁
- 判任官轉任の節心得廿五日 二百一丁
- 官員賞典手當施行心得廿五日 二百二丁
- 諸藩士人材成育の爲南校入學の制廿七日 二百二丁
- 字佛交戦局外中立條例廿八日 二百三丁
- 民政部大藏分省月七 二百九丁
- 中秋祭を男山祭と改稱五日 二百廿二丁

- 兵學寮教官官等被定七日 二百二十三丁
- 販賣鴉片烟律被定九日 二百二十二丁
- 生鴉片取扱規則被定九日 二百二十三丁
- 民政部大藏兩省事務條件被定九日 二百二十五丁
- 寺院住職繼目の制被定九日 二百二十八丁
- 東海道驛費手當米地子代下付方八十二日 二百二十九丁
- 御國民幼童を支那人へ賣渡嚴禁八十三日 二百三十丁
- 鹽種製造規則被定廿八日 二百三十丁
- 上納金囚人等護送宿泊の節番人貨渡方廿八日 二百卅一丁
- 字佛交戦局外中立よ付改定廿九日 二百卅二丁

- 鹿島社香取社御遙拜 九月二日 二百四十三丁
- 官祿現米よて下付 九月三日 二百四十三丁
- 脱籍無産の者復籍規則被定 九月四日 二百四十四丁
- 熱田桑名佐屋路四日市渡船賃改定 九月四日 二百四十八丁
- 九月廿二日天長節御慶辰奉祝 九月七日 二百五十一丁
- 藩制被定 九月十日 二百五十一丁
- 藩知事一門の輩へ位階不賜 九月十日 二百五十五丁
- 宮華族家人職員の制被定 九月十日 二百五十六丁
- 集議院被閉議員賜暇 九月十日 二百五十七丁
- 東京中學校被開 九月十日 二百五十七丁

- 諸藩大少属以下官等被定 九月十三日 二百五十八丁
- 府縣へ廳掌を被置 九月十三日 二百五十八丁
- 伊那分縣中野縣被置 九月十七日 二百五十九丁
- 諸藩願伺書藩名記載 九月十七日 二百五十九丁
- 翰山藩被廢小濱藩へ被併 九月十七日 二百六十丁
- 膳所藩城樓櫓廢徹建議御採納 九月十七日 二百六十丁
- 海陸軍大佐以下官等被定 九月十八日 二百六十丁
- 平民苗字被許 九月十九日 二百六十一丁
- 流刑以下各廳專行 九月廿四日 二百六十一丁
- 海軍資金上納方 九月廿五日 二百六十二丁

- 酒造免許高皆造被許廿九日 二百六十二丁
- 山林野沼其他開墾地規則廿七日 二百六十二丁
- 石巻縣被廢登米縣へ被併廿八日 二百六十六丁
- 酒田縣被廢山形縣被置廿八日 二百六十六丁
- 按察使被廢廿八日 二百六十六丁
- 諸藩兵員の制被定廿八日 二百六十六丁
- 諸藩正權參事の内一員在京三十日 二百六十七丁
- 官員出張歸京後賜休暇の制九月 二百六十七丁
- 等外吏免職滿年賜金の制九月 二百六十八丁
- 藩兵編制の式被定二十日 二百七十一丁

- 海軍御旗章被定三十日 二百七十二丁
- 諸藩職員姓名書届方七月 二百七十三丁
- 藩廳玄關御紋幕挑灯被用十月 二百七十四丁
- 伊太利公使參朝十月 二百七十四丁
- 諸藩朝集年割被定十三日 二百七十五丁
- 建勳社神号改稱十七日 二百九十二丁
- 東京開市に付外國人へ寺社等縦覽十八日 二百九十三丁
- 長岡藩被廢廿二日 二百九十三丁
- 元旦天長節賀表式廿二日 二百九十四丁
- 大坂洋學所開成所と改稱 二百九十六丁

- 解隊復籍の兵府藩縣軍事に使用方 廿九日 二百九十七丁
- 蠶種製造取締規則附録被定月 二百九十八丁
- 知藩事臨時出京心得 二月十日 二百九十九丁
- 外務省中大中少辨務使大少記被置 二月十日 二百九十九丁
- 諸向願伺手續改正 七月十日 三百丁
- 實所臨時御祭典 九月十日 三百丁
- 京都府中學校被附 九月十日 三百一丁
- 諸卿輔以下下馬下乘規則 九月十日 三百二丁
- 東京在留外國人遊歩期程被定 十月十日 三百三丁
- 東京府下測量 十月十日 三百八丁

- 華士族隱居養子願の制 十月十日 三百八丁
- 天社神道土御門家免許被止 十月十日 三百九丁
- 民部大藏兩省城内へ被移 十月十日 三百十丁
- 民部省中察司更定 十月十日 三百十丁
- 工部省被置 十月十日 三百十一丁
- 陸軍生徒諸藩高割人員差出方 十月十日 三百十二丁
- 氷川社行幸御日限 十月十日 三百十三丁
- 海軍所邸地改正 十月十日 三百十三丁
- 脱籍人府藩縣遞送賄費被定 十月十日 三百十四丁
- 濱殿宮内省へ被属 十月十日 三百十四丁

- 諸家諸官員家來尼介等の者復籍調廿四日 三百十四丁
- 工部省邸地改移廿四日 三百十五丁
- 大小神社規則更よ取調方廿八日 三百十六丁
- 氷川社行幸御道筋御泊割廿九日 三百十八丁
- 神祇官諸省大學彈臺長次官參内刻限月十 三百十八丁
- 縁組規則被定四十一日 三百廿二丁
- 海軍兵學寮稱呼被定四十一日 三百廿三丁
- 伏見能久宮と被稱四十一日 三百廿三丁
- 宣教掛事務の者撰舉心得四十一日 三百廿三丁
- 正租雜租の内種々名目石代金納を改正五十一日 三百廿四丁

- 制服被定五十一日 三百廿四丁
- 太政官中舍人局雅樂局御厩局長助以下被置七十一日 三百廿五丁
- 金穀賞與施行方改定八十一日 三百廿九丁
- 諸藩雇外國船不開港回船乘組旅費仕拂方九十一日 三百三十丁
- 諸藩下潰地代米永渡被止九十一日 三百三十丁
- 宮内省内番所被廢九十一日 三百三十丁
- 琵琶神樂道傳授の家被止九十一日 三百三十一丁
- 府藩縣他の貫屬士族借受手續十一日 三百三十三丁
- 彈正臺員の名を偽稱の者取締方十一日 三百三十三丁
- 貢米納方十一日 三百三十三丁

- 徴兵規則 十一月十三日 三百三十四丁
- 農商襟高袴割羽織着長脇差帶刀通行被止 十一月十四日 三百三十八丁
- 帶刀者外國人居留地通行心得 十一月十四日 三百三十八丁
- 驛法改正の内駕籠人足の制改定 十一月十五日 三百三十九丁
- 鎮魂祭新嘗祭被行 十一月十七日 三百四十丁
- 新嘗祭よ付参拜の制 十一月十七日 三百四十丁
- 御厩局中馬醫被置 十一月十七日 三百四十一丁
- 流刑を止め准流法被設 十一月十七日 三百四十一丁
- 親王堤燈印御改定 十一月十八日 三百四十二丁
- 舊官人諸大夫中大夫等位階被止及び國名 十一月十九日 三百四十三丁
- 并舊官名を通稱するを被停

- 馬車駢車無燈通行被禁 十一月十九日 三百四十三丁
- 神職有位の者官省出仕中舊位階被停 十一月廿一日 三百四十三丁
- 華族元武家の輩東京住居よ被定 十一月廿一日 三百四十四丁
- 地方貫属の者扶持米給與手續 十一月廿一日 三百四十四丁
- 天智帝千二百年祭御執行 十一月廿二日 三百四十九丁
- 崇神帝千九百年祭同上 十一月廿二日 三百四十九丁
- 元明帝千五十年祭同上 十一月廿二日 三百四十九丁
- 御歴代御追祭御式年奉仕等の制 十一月廿二日 三百四十九丁
- 免官の者達方 十一月廿二日 三百五十一丁
- 英國人二名被害よ付捕縛方 十一月廿四日 三百五十二丁

- 内侍所御祭典廿五日 三百五十三丁
- 諸道人足賃錢十二倍増よ被定廿七日 三百五十四丁
- 舊幕府譜代并卒の區別廿七日 三百五十五丁
- 社寺領六年平均石高取調廿八日 三百五十五丁
- 寺院廢止合併の寺号宗派取調廿八日 三百五十五丁
- 府藩縣交涉訴訟准判規程廿八日 三百五十六丁
- 大舍人以下相當位并中伶人を被置廿八日 三百五十六丁
- 梶井宮を梨本宮と照高院を北白川宮と改稱晦十一月 三百五十七丁
- 由利公正へ勳勞祿を賜る晦十一月 三百六十八丁
- 太政官中小舍人被置月十一 三百六十八丁

- 舍人雅樂内舍人御厩の局中權助を被置十二月 三百六十八丁
- 工部省艦旗製作所掲旗被定十二月 三百六十九丁
- 東海道郵便信書箱切手賣下所被置四月 三百七十丁
- 府藩縣廻米五里外運賃被下方四月 三百七十二丁
- 相州城が島燈臺設置九月 三百七十三丁
- 諸上納金証文用紙被定十二月 三百七十三丁
- 元堂上華族地方官へ貫屬觸頭を被置十二月 三百七十四丁
- 四親王外新家ハ二代より華族よ被列十二月 三百七十五丁
- 宮華族並舊官人以下祿制被定十二月 三百七十五丁
- 宮華族家來二代以下の者手當賜方十二月 三百七十七丁

- 府藩縣諸關勘合印鑑彫刻 十二月 三百七十九丁
- 宮華族元堂上家人規則 十二月 三百八十丁
- 孝明帝御祭典 十二月 三百八十二丁
- 巖山司被廢 十二月 三百八十二丁
- 海軍服制陸軍徽章被定 十二月 三百八十二丁
- 留守官宮內省へ被併 十二月 三百九十九丁
- 留守官御祭典式其他職制 十二月 四百丁
- 官員姓名署式 十二月 四百丁
- 越前へ本保縣被置 十二月 四百丁
- 各藩常備兵編制方 十二月 四百一丁

- 海外留學規則被定 十二月 四百六丁
- 賣藥取締規則被定 十二月 四百十三丁
- 在官人有位共姓名記署式 十二月 四百十四丁
- 高須藩名古屋藩へ被併 十二月 四百十五丁
- 守山藩松川と改稱 十二月 四百十五丁
- 寺院寮被置 十二月 四百十五丁
- 農工商獵刀帶刀を被止 十二月 四百十五丁
- 街上放歌大言縱行狂暴の舉動被禁 十二月 四百十六丁
- 雇人抱入身元取組方 十二月 四百十七丁
- 家私塾開業心得 十二月 四百十七丁

二冊

- 三府開港場取締心得被定 廿四日 月 四百十八丁
 - 外國人へ賣買品約定取替せ方 廿五日 月 四百廿二丁
 - 爲替會社發行三五厘札引替方 廿六日 有 四百廿三丁
 - 僧侶持戒宗規遵守の諭達 廿六日 月 四百廿四丁
 - 勅祭社神祇官直管社家賀表上申方 廿六日 月 四百廿四丁
 - 相州劍崎燈臺建設 月 十二 四百廿五丁
 - 元日朝拜着服の制并正月式 月 十二 四百廿七丁
- 辦官
- 官員并諸家士地方在留中公事呼出方 晦日 月 七十一丁
 - 官員印提燈所用方 四月 五日 百卅三丁

三冊

- 刑餘遺骸試驗に用るを被止 月 四月 百五十丁
 - 官省日記文書取調 廿九日 月 百七十一丁
 - 判任出仕宣旨心得 廿九日 月 二百九十七丁
 - 賞與施行伺届上申心得 月 十二 四百廿六丁
 - 華族履歴取調方 月 十二 四百廿七丁
- 神祇官
- 諸官員宮華族宣教講義傍聽 四月 日 百三十一丁
- 外務省
- 外國人雇入規則 十二月 十八日 三十六丁
- 民政部

四州

- 蠶種製造取締蠶札渡方 正三月 十六丁
- 養蠶法取調 月二 七十二丁
- 諸驛附屬村々差免方 月二 七十七丁
- 番幕府以來助郷不勤村方示談諭方 七十七丁
- 牛馬賣買人鑑札渡方 三四月 百十七丁
- 府藩縣御預所勘定帳上申方 三月 百廿七丁
- 戊辰租稅勘定帳突合調方 三月 百廿九丁
- 郷帳記載差出方 月四 百五十丁
- 貢米廻漕船幟印被定 月四 百五十二丁
- 武州新川口通船番所廢止 月四 百五十四丁

五州

- 外國輸出蠶卵紙製作數届方 月五 百八十一丁
- 隄防用惡水路修繕費石高割出金 月五 百八十一丁
- 氏子改仮規則 六月十日 百八十三丁
- 貢米廻船難破漂着取扱方 月六 百九十三丁
- 諸申牒調印記載方 月七 二百十丁
- 蠶種紙輸出よ付告諭 月七 二百十丁
- 上品蠶種褒賞規則 月八 二百卅五丁
- 伺届文面詳細記載方 月十 二百九十八丁
- 貨幣入御用狀宿繼送達を止む 十八日 三百十丁
- 宿驛本陣の稱を被止 閏四月廿四日 三百十五丁

六州

○大藏省

○官祿渡米金割合方 廿三日

二十丁

○官祿正米渡方 月三

百卅丁

○潰地代永渡被廢 月七

二百十四丁

○檢見規則 月七

二百十五丁

○貢米運送船規則 月七

二百十七丁

○貢米廻漕船難破の節運賃渡方規則 月七

二百廿丁

○米麥相場唱へ方 月八

二百四十丁

○田方都て米納よ被定 月八

二百四十二丁

○檢見平均収租伺出方 月八

二百四十一丁

七州

○諸街道繼人足賃錢拂渡方 月八

二百四十二丁

○蠶種製造規則附錄 月九

二百六十八丁

○爲替會社發行預手形引替期限 十四日 月

二百八十九丁

○兵部省

○兵學寮生徒規則 月十

三百廿丁

○大學

○大學規則 月二

七十八丁

○東京府

○火災場所材木代職工賃直増被止 廿日 月

十九丁

○家作建造方及道敷取締方 廿七日 月

廿一丁

○御用船賃割増	十二月	卅四丁
○紡績機織女工授業方	三月廿三日	百廿丁
○同上よ付諭達	四月五日	百三十四丁
○士卒受領地引替願方	四月五日	百三十五丁
○郭内住居邸宅引替願方	四月十四日	百四十一丁
○三代以上以下諸家來扶助賜金	五月廿七日	百七十二丁
○迷ひ兒知るべ石碑建設	九月十四日	二百五十九丁

假名 公布せ寫第三冊目次 終

假名 公布せ寫第三冊
傍訓

○明治三年 庚午

詔書 正月三日

朕恭惟天神天祖立極垂統列皇相承繼之述之祭政一致億兆同心
 治教明干上風俗美干下而中世以降時有汚隆道有顯晦矣今也天
 運循環百度維新宜明治教以宣揚惟神之道也因新命宣教使布教
 天下汝群臣衆庶其體斯旨
 宣教使心得書

一 教典誦讀講談の節ハ禮服用威儀を敬慎すべき事
 一 已を修めて然る後よ人を教ふべく已を正くして然る後よ人
 一 を正すべし是故よ其身に於て眞よ皇祖の大道を昭明よし眞

二
よ皇祖の大教を尊信し死生不惑神明に依頼し我が言行を敬
慎し身を以て天下衆庶の先導たらん事を志願す可し是
の第一義也

一 教官たる者ハ我誠心を以て億兆を誘掖薰陶して信從せしむ
るよわり先輩の儒佛を排斥せんハ道を論ぜんことよて是ハ
學校よ於て學問の上よは爲すべきなれども今日教と布くと
さハ他を誹謗し一毫も争氣ありてハ人を服する事能はず大
よ教化の大害と爲れば深くこれを慎むべしこれ教官第一
の心得なり

一 教官たる者第一大教の御趣旨深く其心よ理會し説諭の際意
義失誤無之様誠實懇篤よ誘導し大よ教化を宣布するを以て

要とすべき事

一 説諭の際牽強附會荒唐戲謔の語言を發し世を惑ハし人を誣
ふる等の談説嚴よ禁止すべき事

一 懶惰慢易の風深く相愼み言語行事の間尤恭敬謹慎を主とし
人の輕侮を來し候様の舉動有之間敷事

一 飲食男女大慾之所存人の過失此二事より生ず別して謹慎と
加ふべき事

一 貪汚の風聊も有之時ハ大よ人心を損じ嫌忌を招き深く教化
の妨害と相成候間嚴よ戒愼すべき事

三
一 御威光を負ひ人を凌侮し我意我慢の振廻等堅く愼むべし威
嚴ハ已れの威儀言行を愼むより生じ候事よて聊も圭角を威

四

嚴を立つ間じく和易簡約忠恕の風心掛へき事

一 教官の衆庶の直よ信仰依頼いたし候様心を可用事也依之居所飲食より驛路宿泊人馬繼立等よ至る迄易簡を主とし衆庶の迷惑を思惟し人よ厭はれざる様其身勤儉の實行相立人望で敬服信從せん事を要すべき事

一 巡行先よ於て孝子義僕節婦其他嘉徳善行異才異能の者見聞よ及び候は、其所の府藩縣よ申し通ずへし又善事を妨げ良民を病しめ姦匿暴戾其他惡行惡意の者見聞候は、其家族組合を始め頭立候者をも呼寄せ人事を盡し百方教諭を加ふべし一人よても教化よ漏るゝ者あるゝ其責吾よわりと篤く念慮よ懸くべく教よ從へざる者あるゝ教官の不手際なり改心

致す者あれば教官の功たるべき事

一 巡行先に於て願書訴狀等取次の儀一切停止並私謁苞苴取扱

よ涉り候様此儀致間敷ハ勿論たる可き事

一 希望の者有之候共禁厭祈禱の儀一切停止の事

一 大命を奉承し諸國よ巡行し其境よ至り其所の管轄府藩縣の

吏士よ會し案内よ應じ教諭すべき所よ至り神職村長町老以下男女よ限らず其人員を計り日割を以て會集せしめ教典を誦讀し講談勝導懇切を盡すべき事

但し民庶遠方より招く可からず一日よ往返するを期とす
べき事

五

一 府藩縣教官も右條件よ准じ其宜きよ隨ふべき事

六 詔書

正月三日

朕恭惟太祖創業崇敬神明愛撫蒼生祭政一致所由來遠矣朕以寡
弱夙承聖緒日夜怵惕懼天職之或虧乃祇鎮祭天神地祇八神暨列
皇神靈于神祇官以申孝敬庶幾使億兆有所矜式

〔太政官〕御沙汰 正月四日

東座 天神地祇

中央 八神

〔神產日神 高御產日神 玉積產日神 生産日神〕
〔足産日神 大宮賣神 御食津神 事代主神〕

西座 御代々皇靈

右の通よ候條相達候事

〔太政官〕御沙汰 正月八日

兵部省

是迄其省支配よ被仰付置候石狩國石狩郡後志國高島郡小樽郡
釧路國白糠郡足寄郡阿寒郡自今開拓使管轄被仰付候間引渡可
申事

開拓使

是迄兵部省支配よ被仰付置候石狩國後志國高島郡小樽郡釧路
國白糠郡足寄郡自今開拓使管轄被仰付候間受取可申事

金澤藩

七 北見國宗谷郡の内開拓使支配の分其藩へ増支配被仰付候事
但移住の者共其儘管轄可致候事

〔太政官〕御布告

正月九日

先年來舊籍を脱し諸方流浪罷在候者共よ付ては厚き思召被爲
 在其舊國よ於て大逆無道を除くの外御一新更始の御政體を體
 認し舊惡を不糺夫々復籍生活の道無差支標可取計旨每度被仰
 出有之候處間に御趣意よ違ひ苛察の處置致候向も有之哉よ
 相聞へ左候てハ御趣意も難被行候條府藩縣よ於て尙又篤と相
 辨へ復籍人被引渡候節ハ前罪を不糺早々舊籍へ引取生計相立
 候様可取計旨更よ被仰出候事

〔太政官〕御沙汰

正月九日

東京府

脱籍無産の者共復籍の儀よ付每度被仰出も有之今般尙又別紙

の通各府藩縣へ被仰出候間其府よ於て當時復籍方専ら取計罷
 在候得共右復籍人引渡候節其向々へ御趣意の次第懇切可申聞
 旨御沙汰候事 (別紙ハ前布告をいふ)

〔太政官〕御沙汰

正月九日

留守官

今般士族並卒地方官貫屬被仰付候よ付てハ是迄其官管轄の士
 族卒京都府へ引渡可申候事

〔太政官〕御沙汰

正月九日

留守官

京都學校追て御規則相立候迄是迄の通其官支配被仰付候事

〔太政官〕御沙汰

正月九日

今般其縣廳濱田表へ相移し改て濱田縣と可稱事

〔太政官〕御沙汰 正月九日

兵部省

京都御留守警衛藩々兵隊太政官より被仰付置候處以來進退の儀其省より可申達旨被仰出候事

〔太政官〕御達 正月九日

御會始御題別紙の通被仰出候間勅任官并宮華族各詠進可有之候尤來廿四日辰半刻無遅々持參宮内省へ可差出事

但詠進無之輩へ前以斷り可差出事

別紙

御題

春來日跋

〔太政官〕御沙汰 正月十日

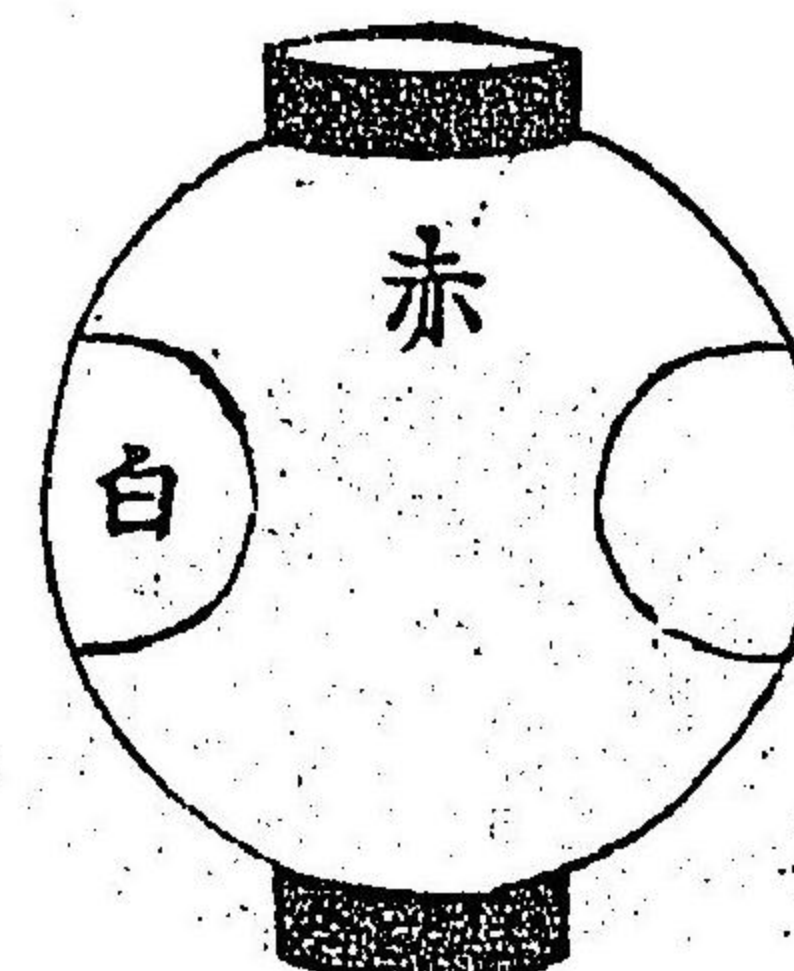
是迄其省支配に被仰付置候後志國太檜郡瀬棚郡膽振國山越郡三郡今般松平慶三郎へ支配被仰付候間引渡可申事

〔太政官〕御布告 正月十二日

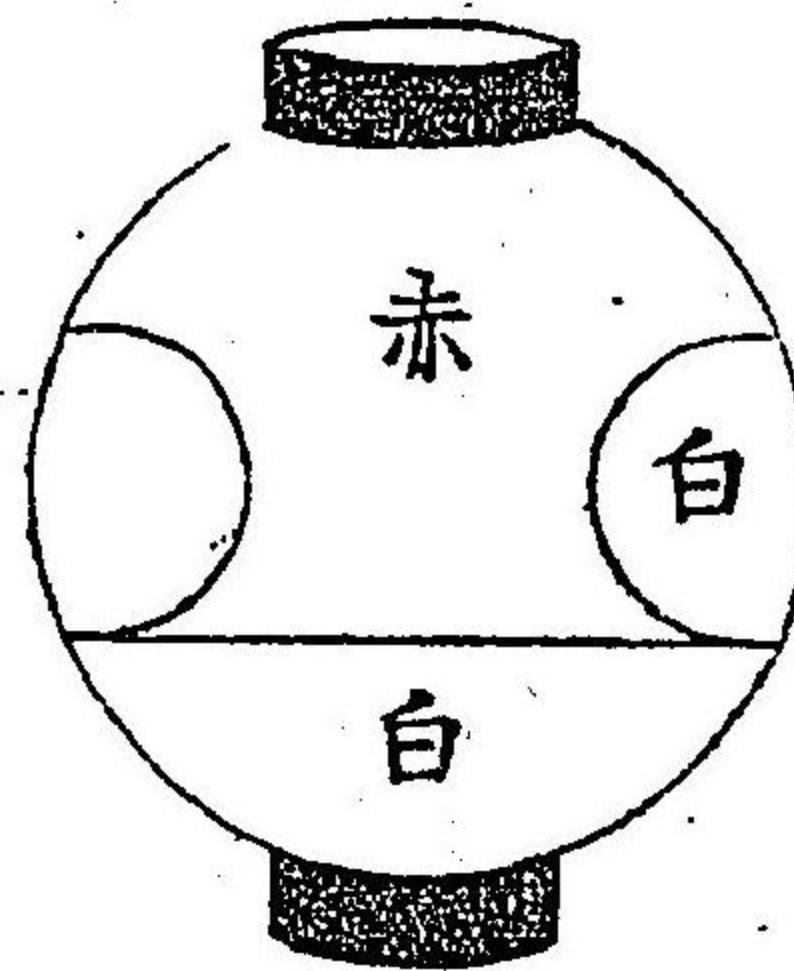
陳笠の御印圖面の通御定相成候事

提燈の御印圖面の通御定よ相成候間府藩縣一殿赤印并よ紛敷印ハ一切不相成候事

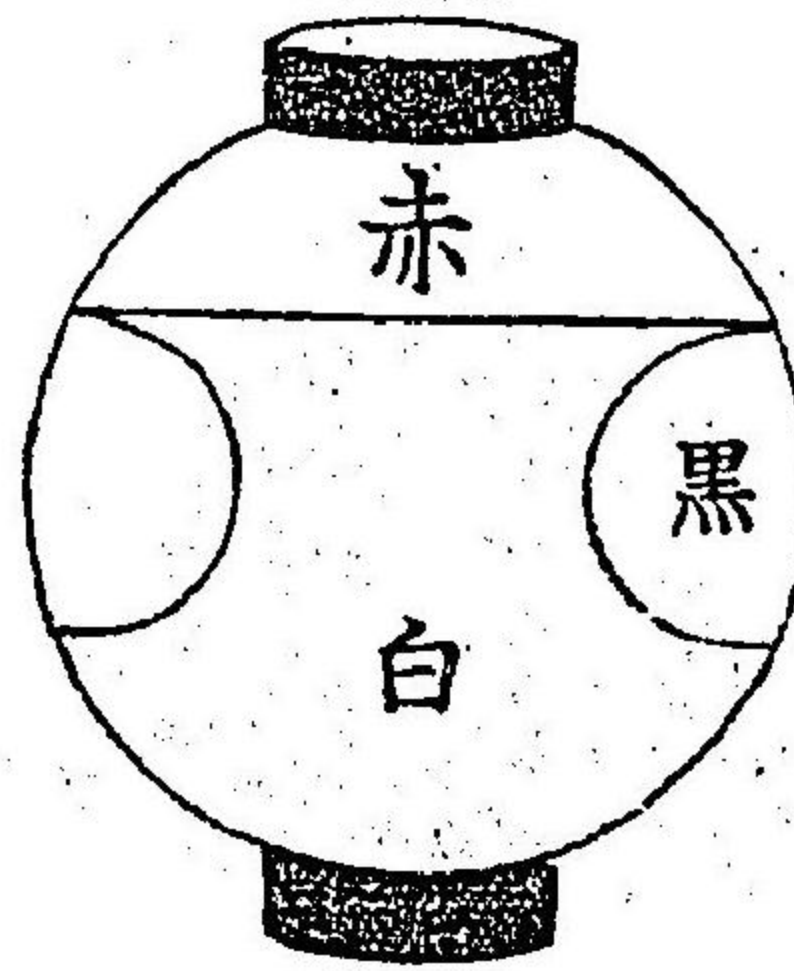
親王
何レモ自分紋自三所



勅任

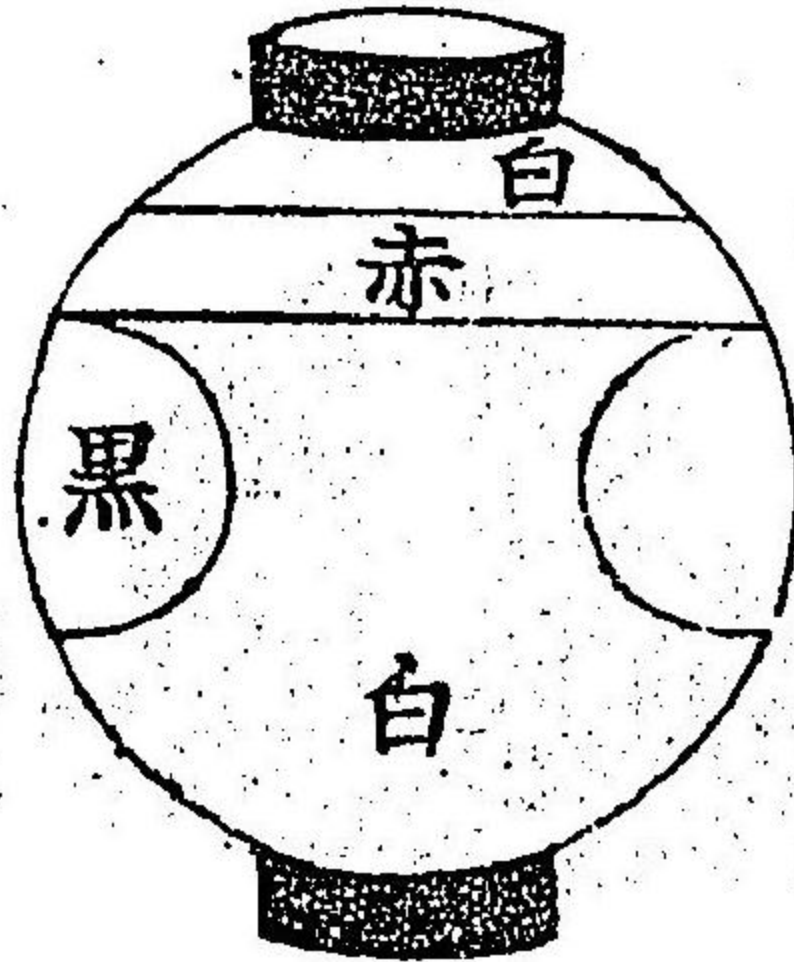


奏任
同紋黒三所



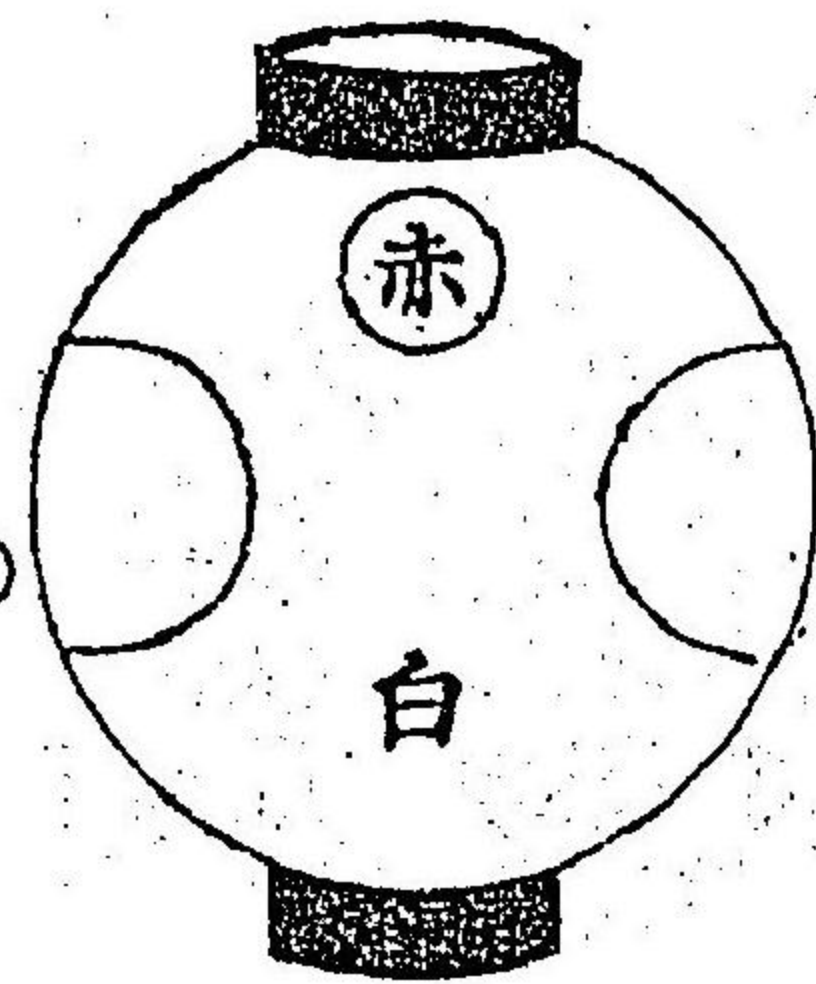
判任

紋ヲ上其半ヲ赤ス

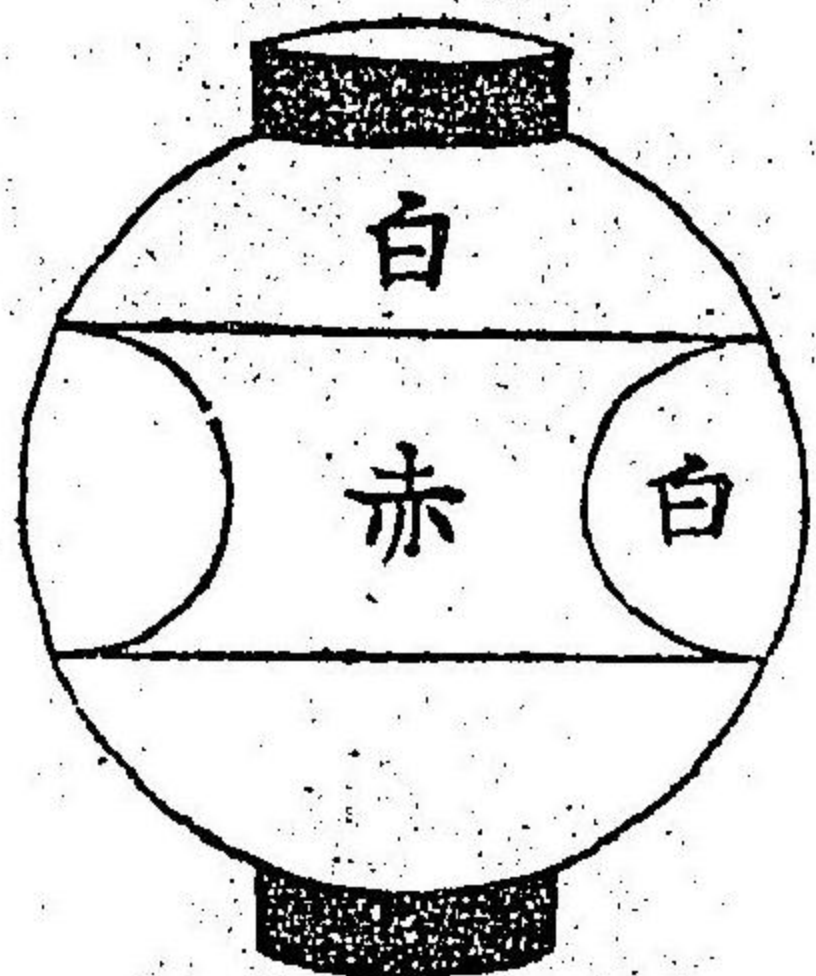


使部仕丁以下

印赤丸三所ヲイニ寸

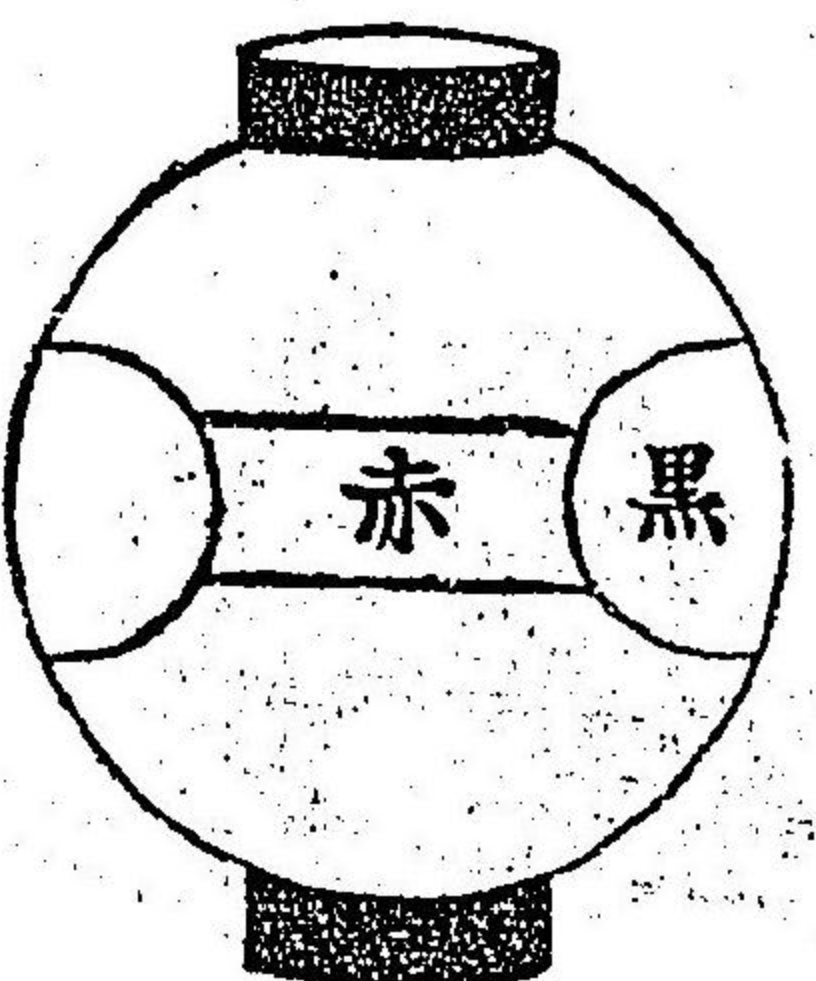


非役華族及非役四位以上



非役有位

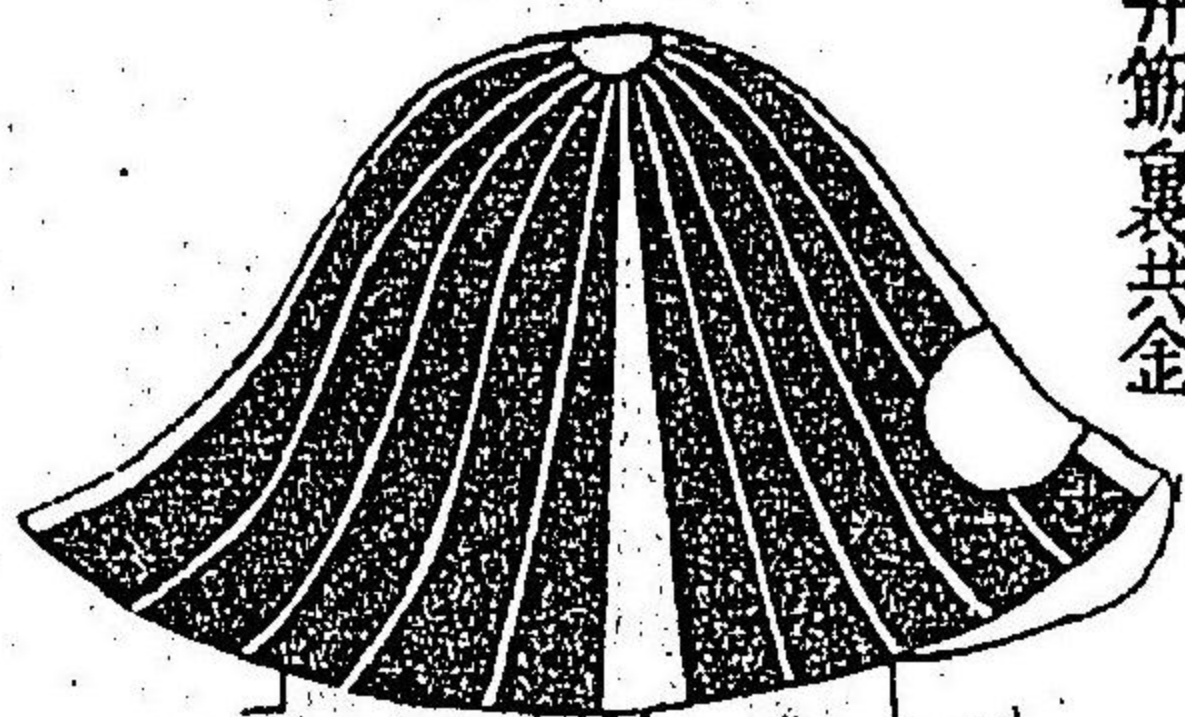
三分ノニヲ赤クス



陣笠の御印圖の通御定相成候事

紋并筋裏共金

親王

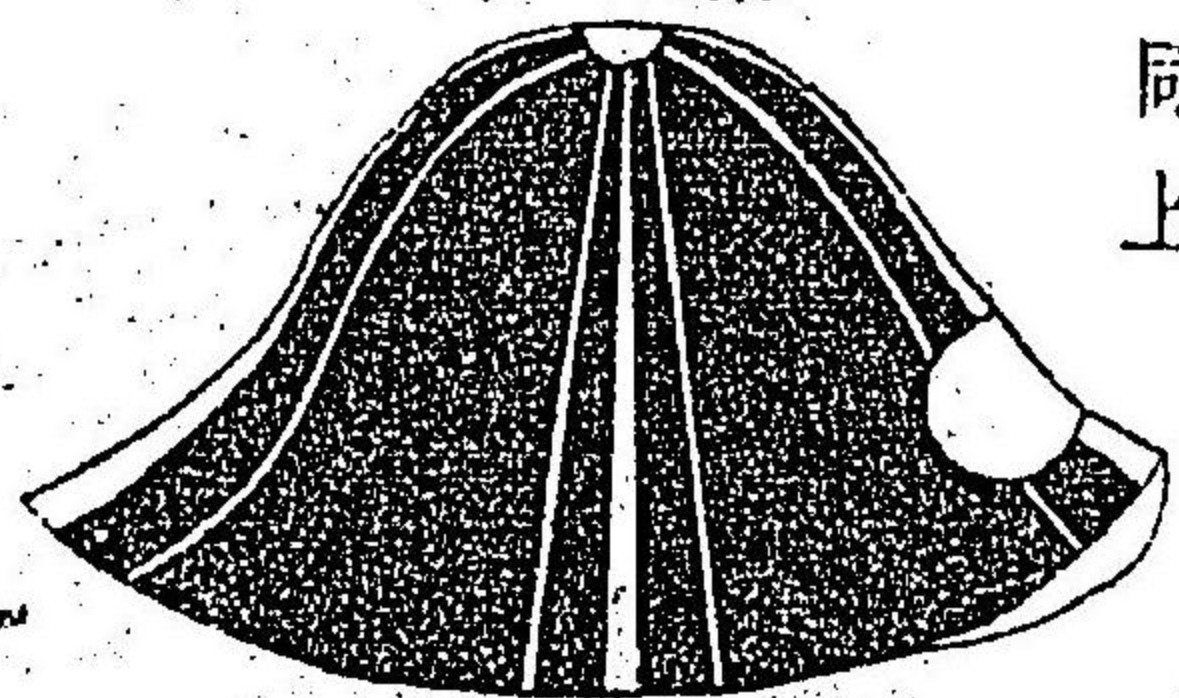


巾一分
巾一寸
明寸
明寸

同上

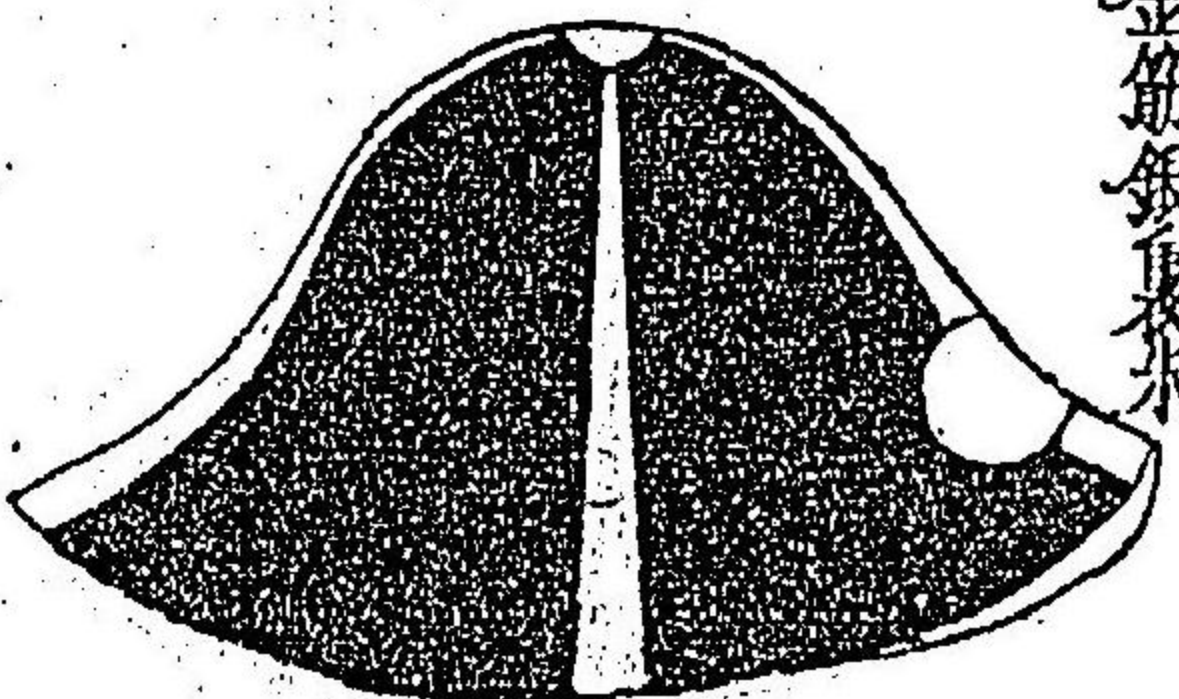
紋金筋裏共銀

奏任



紋金筋裏共銀

判任

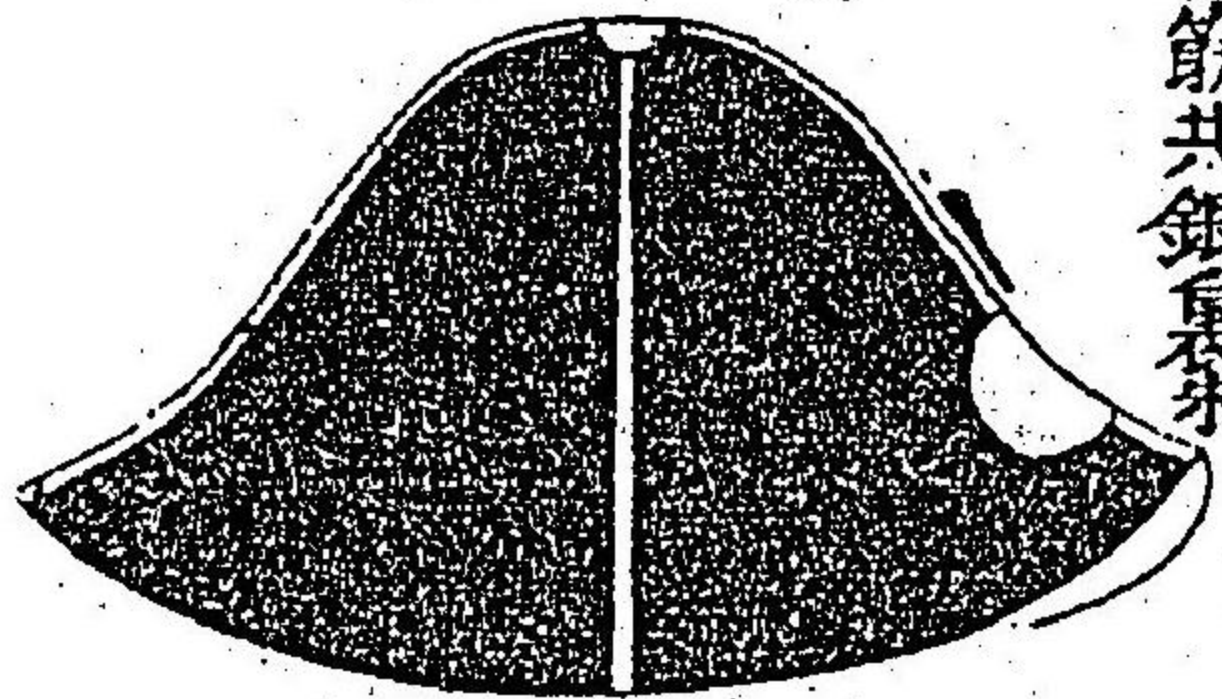


紋并筋共銀裏朱

使部

仕丁

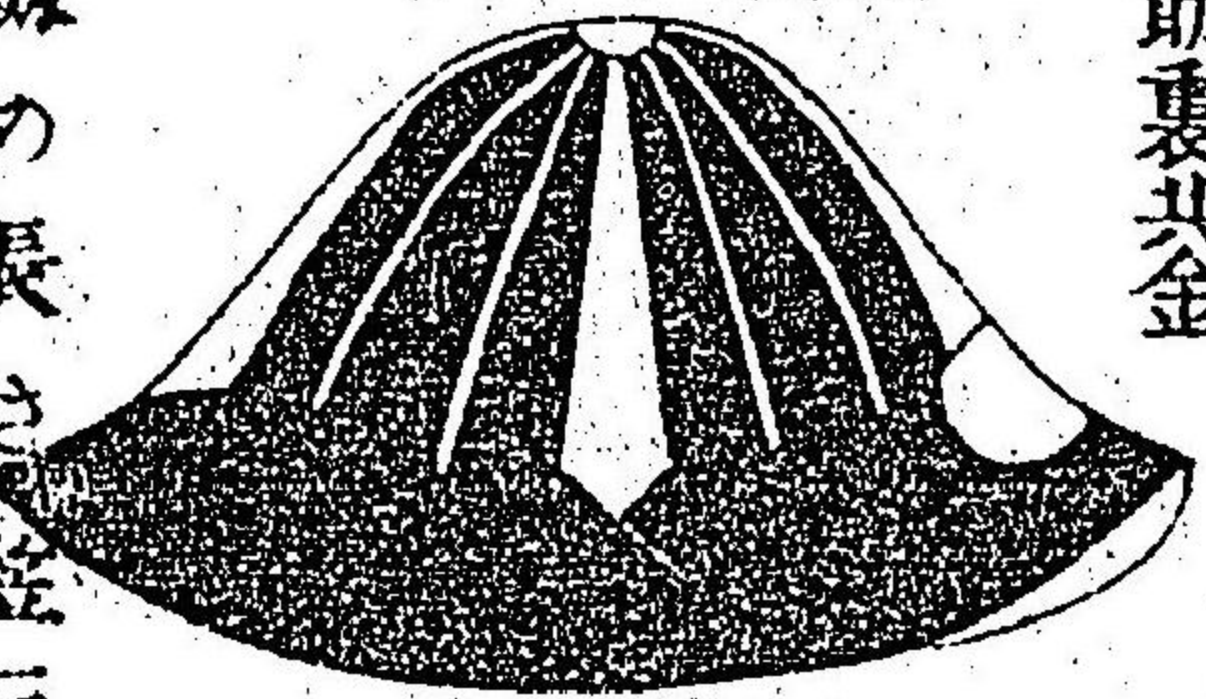
以下



巾二分

紋并筋裏共金

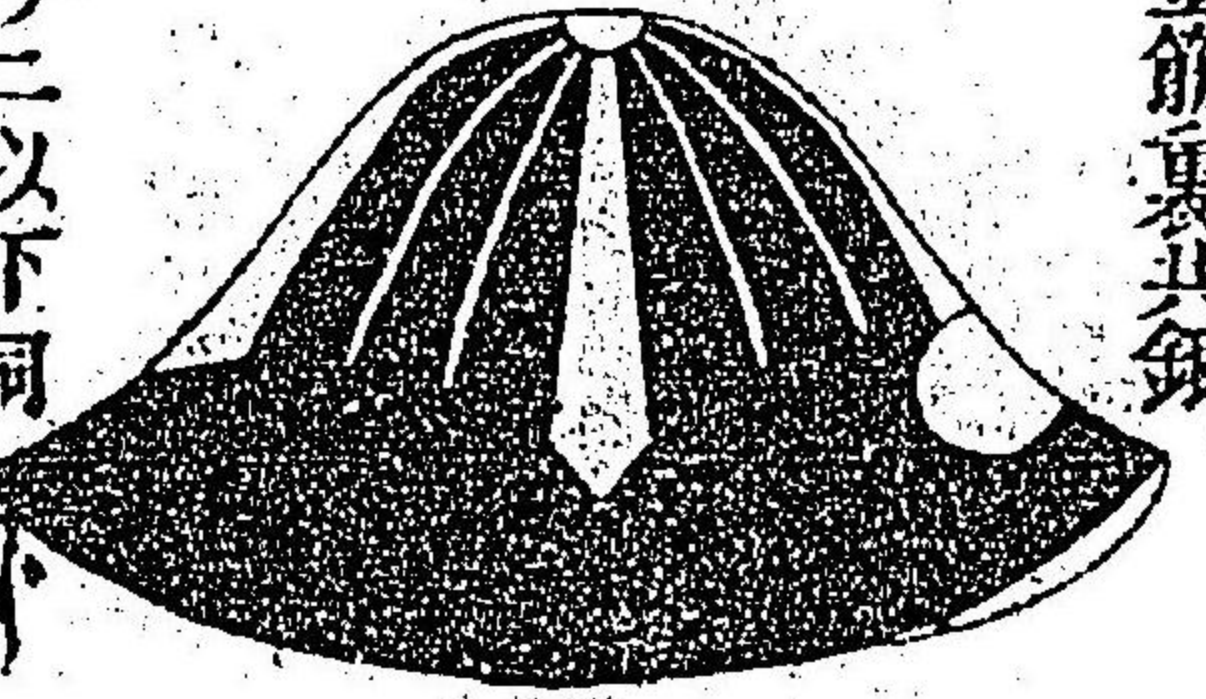
非華及役
非族以四



釧の長さ笠三分の二以下同

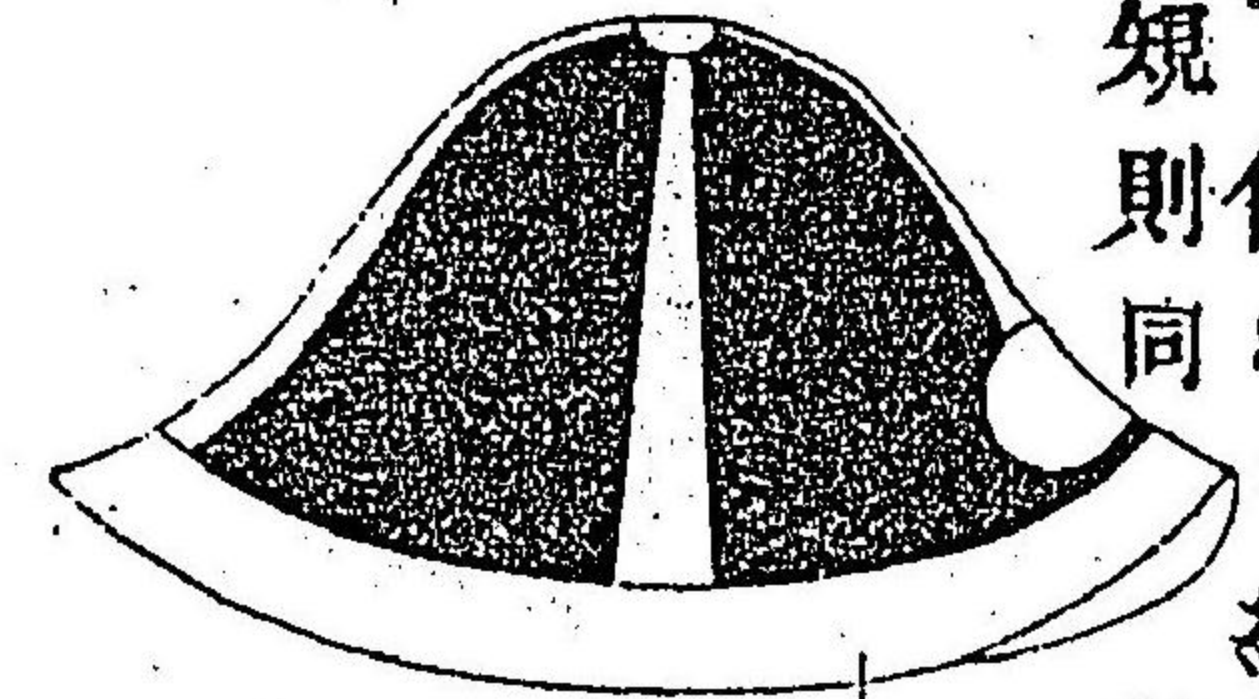
紋金筋裏共銀

非役
有位



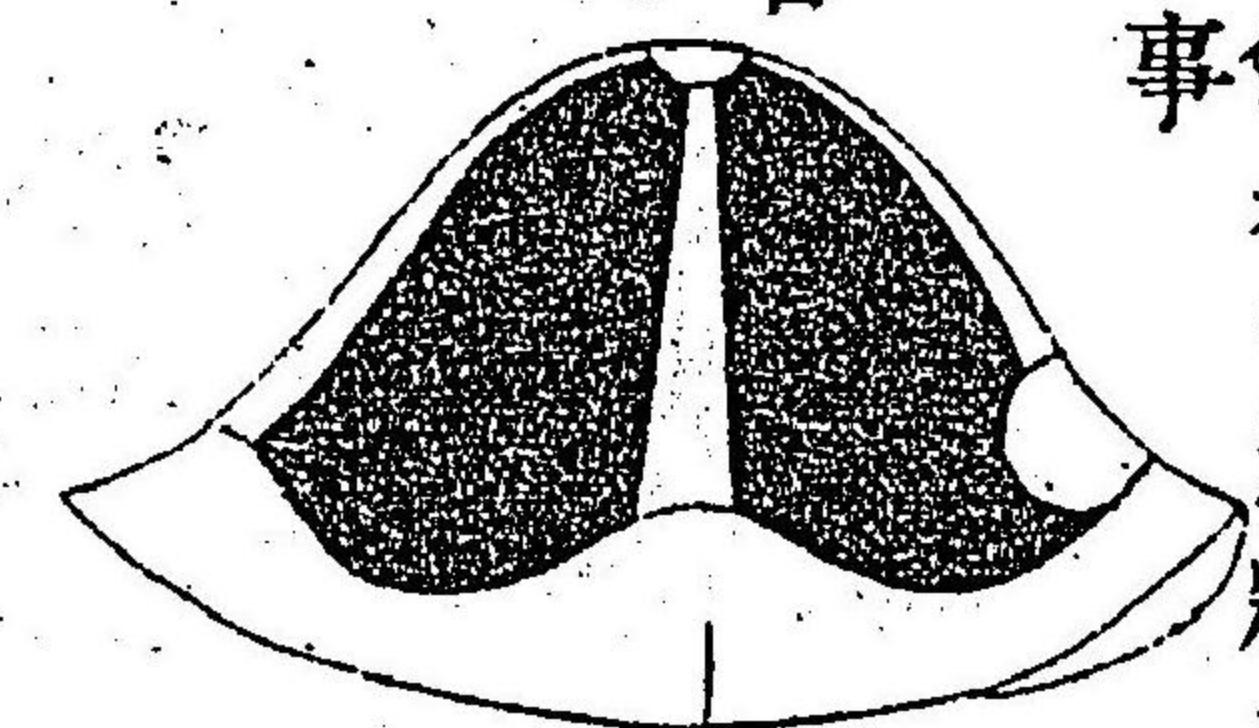
以下何れも紋筋并裏等金銀朱の差別及び筋の大小多少ハ前書御規則同様可相心得事

彈正臺



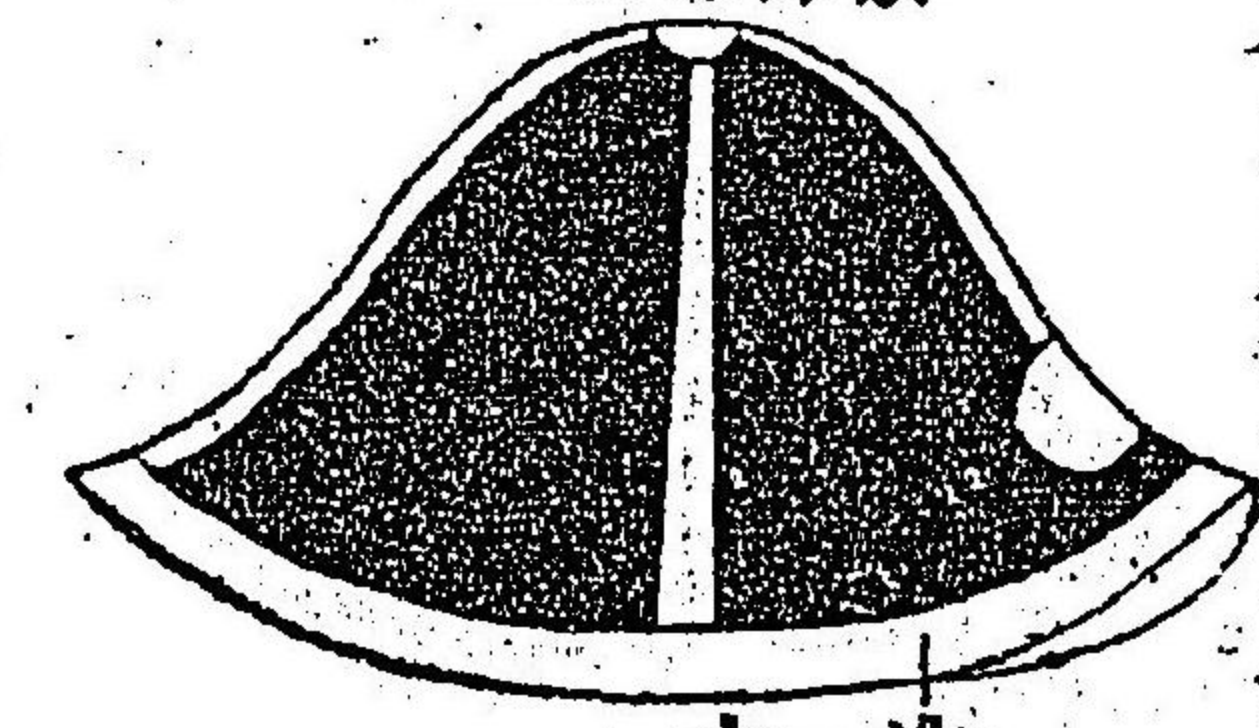
巾二寸

刑部省
建部司



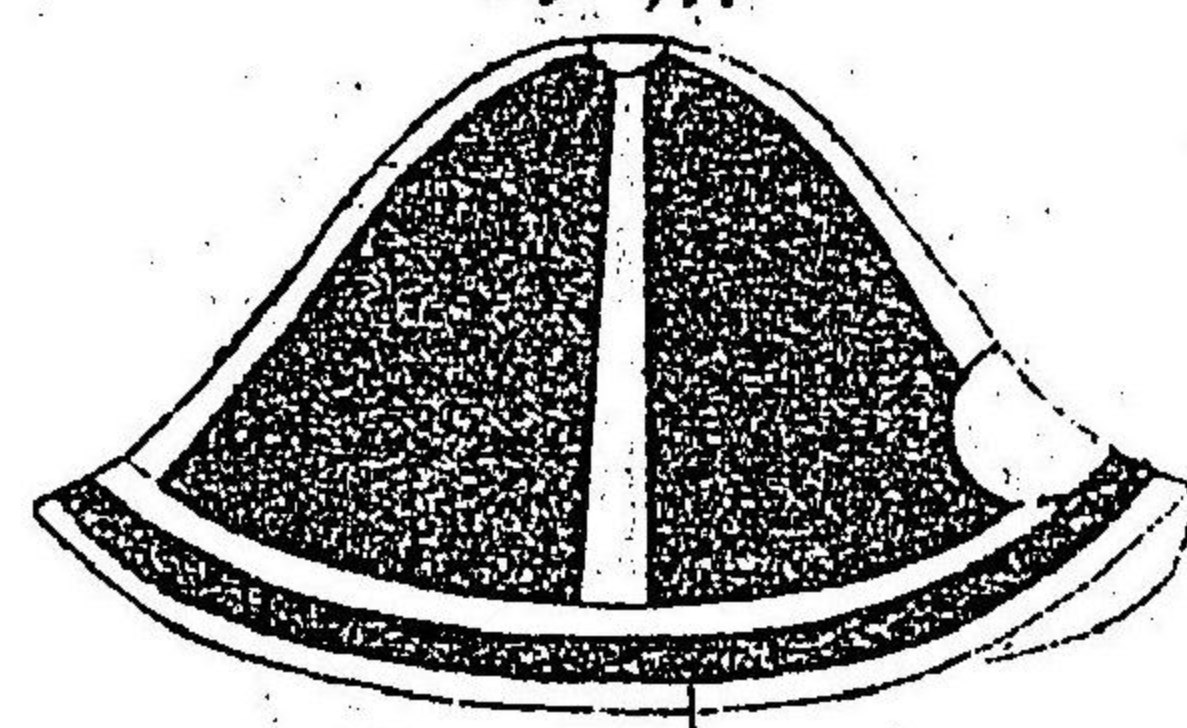
連山廣き
処二寸
狭き
処五分

京都府都
府捕方

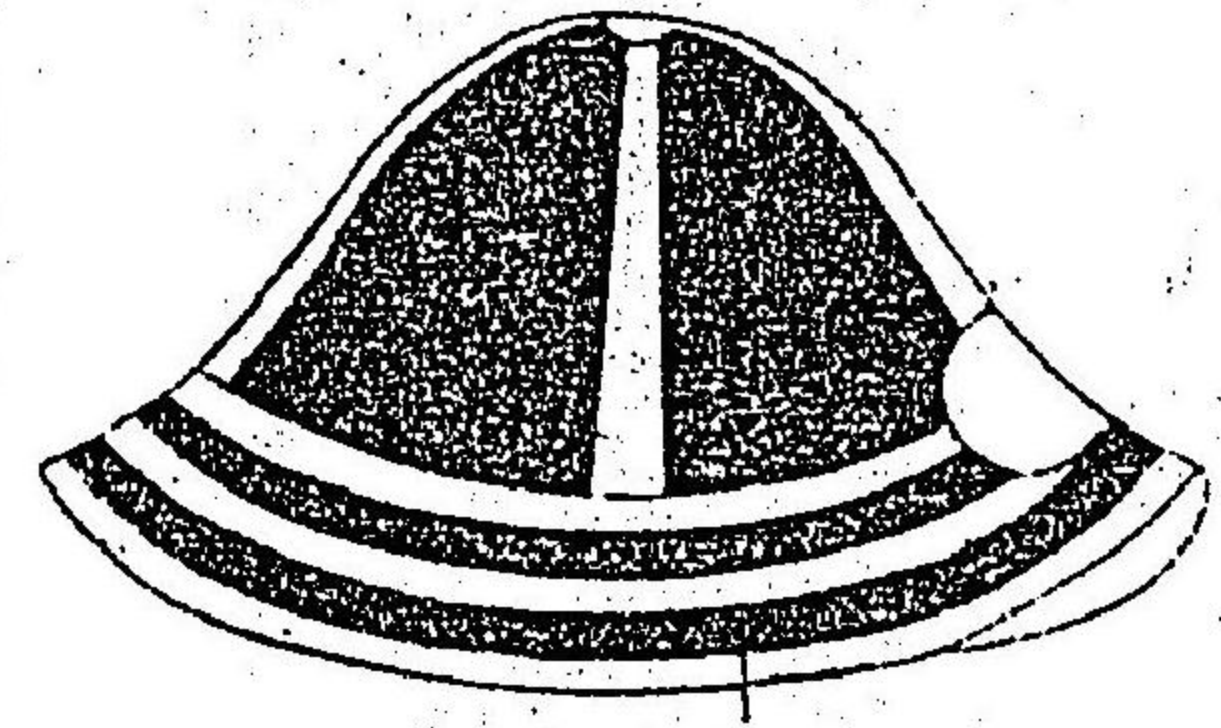


巾一寸

東京府
捕方



巾并大
明共五
分捕方



巾并
明共三
分捕方

〔太政官〕御布告 正月十二日

是迄朱坐と唱へ年寄又ハ取次所等の名目よて受領地杯所持の者も有之候處總て被廢候事

但商法の儀ハ追て通商司よ於て取調の上可相違候事

〔太政官〕御布告 正月

來十五日より節朝參賀八字參朝の事

但參不參とも其長官より一紙よ相認辨官ハ可届出彈正臺ハ

ハ不及届出候事

〔太政官〕御布告 正月十三日

來十七日本丸よ於て軍神御祭り祝砲有之候よ付爲心得相違候

〔太政官〕御沙汰 正月十三日

名古屋藩

浦上村^{いづみ}宗門^{しゅうもん}の徒七拾一人更^{さら}よ其藩へ御預多^{おごひたる多し}被^ま仰付候事

〔民部省〕御達 正月十三日

紙^{かみ}渡世の者近來慢^{また}りよ相成夜附其外^{ほか}性^{せう}合^あ不^ふ宜^い品製作賣捌致し夫がため中外商人破産のもの不少右よ付製作人共後日可相^あ亂^{らん}節出所不相分差支候よ付向後爲^な取締鑑札へ紙敷を記し相渡^わ筈に候條得^え其意其府藩縣支配中貿易所へ可^べ差廻分惣員數凡目當并鑑札願請候名前共早々取調來二月廿日迄よ通商司へ可^べ申^ま立^た事

右の趣不洩様可相觸者也

〔太政官〕御達 正月十七日

安藝周防長門
伊豫豊前豊後

各藩

日田縣

近日佛國軍艦内海測量として從備前尻見以西長門下の關迄罷越候事宜により上陸も可致間兼て相心得不都合無之様可取計^し事

〔太政官〕御布告 正月十八日

桃園天皇 御崩日七月十二日
御發喪七月廿二日

七十 後桃園天皇 御崩日十一月廿九日
御發喪十一月廿九日

後櫻町天皇

御崩日 閏十一月三日
御發喪 十一月三日

仁孝天皇

御崩日 正月廿六日
御發喪 二月六日

右四帝御崩日を以御祭日と被定候事

〔太政官〕御布告 正月十九日

外國航海の儀出願の規則向後左此通

一 帶刀以上の者ハ管轄府藩縣へ願出府藩縣よ於て篤と取亂の上外務省へ相伺彌不都合の廉無之候ハ、御印章御渡開港場より乗船御許容可相成候事

一 其餘の者ハ管轄府藩縣よて相亂不都合の廉も無之候ハ、其旨書面よ認め當人へ相渡開港場裁判所へ右書面持參願出可申同所よ於て更よ當人亂方は迄の通相心得彌以不都合の儀

も無之候ハ、同所より直よ御印章相渡追て外務省へ相届可申事

右の外總て先般御布告の通よ有之候間府藩縣共其旨可相心得候事

〔東京府〕御 達 正月廿日

去冬以來所々出火有之類燒場所も不少候よ付てハ材木其外高直よ賣捌又ハ職人賃銀割増等請取候者有之哉よ相聞以の外の事よ候右様の者有之よ於てハ吟味の上急度可申付候條心得違の者無之様可致候

右の趣市在不洩様可觸知者也

〔太政官〕御布告 正月廿三日

廿

來る廿六日仁孝天皇廿五年御祭日（山陵御遙拜被爲在候事）付山陵御遙拜被爲在候事
但廿五日酉の刻より廿六日午の刻迄御神事候事

〔大藏省〕御達 正月廿三日

官祿渡米金の儀去る己十月より當年九月迄ハ當年入費ノ屬シ
候儀ノ付十二月割來十月より來未年九月迄ハ同年入費ノ屬
シ候ノ付閏月入十三ヶ月割の事

右の通確定候間及御廻達候也

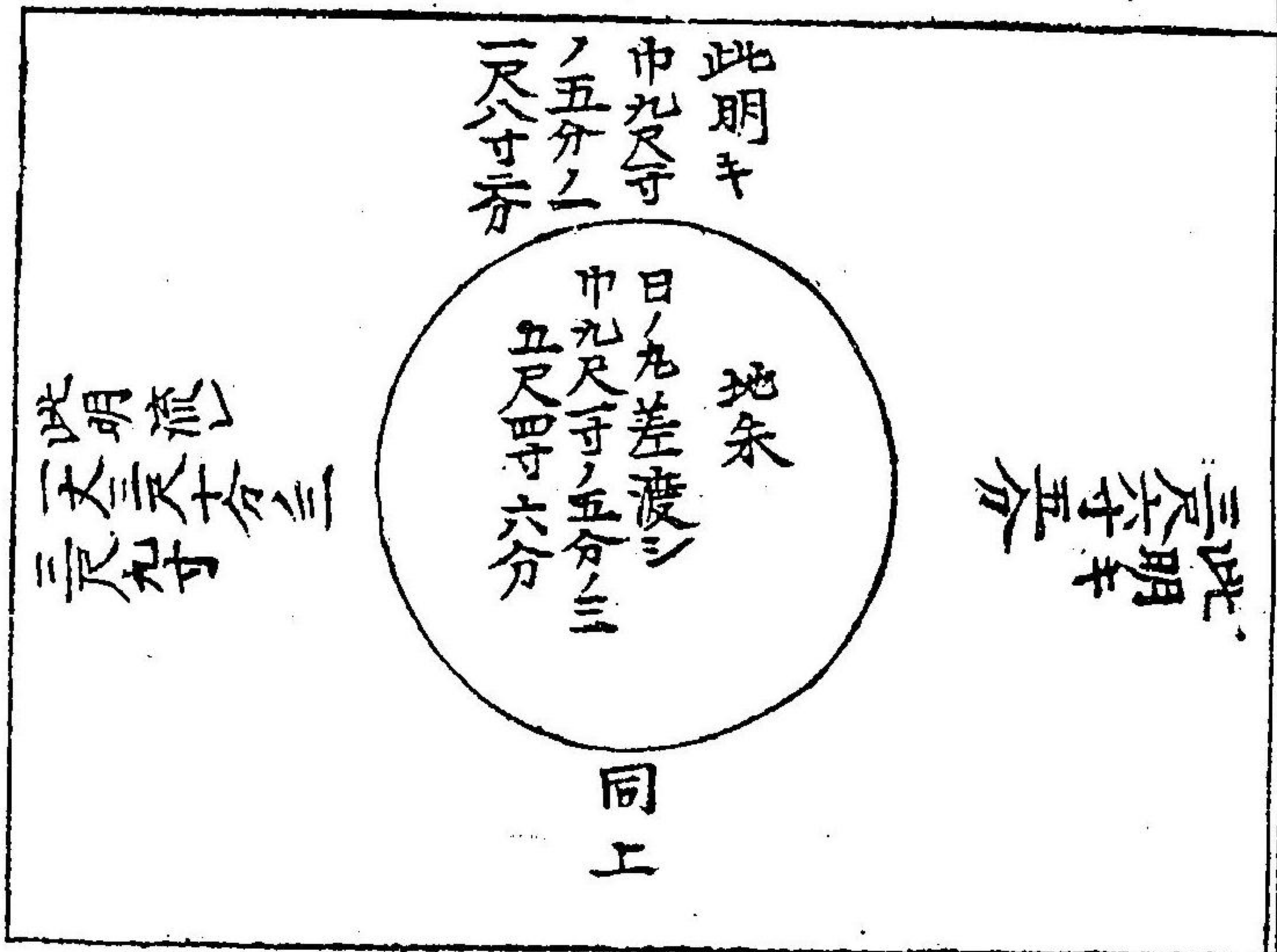
〔太政官〕御布告 正月廿四日

御所近火の節時打櫓（やぐら）ノ於て太鼓鐘打交候間爲心得相達候事

〔太政官〕御布告 正月廿七日

郵船商船規則別冊の通御定ノ相成候條此段相達候事

祝日可用分
大旗之圖 凡而曲尺



平常可用分

中旗寸法

流 壹丈

豎 七尺

日ノ丸差渡四尺貳寸

同先ノ明キ三尺

同乳ノ方明キ二尺八寸

風雨之節可用分

小旗寸法

流 六尺

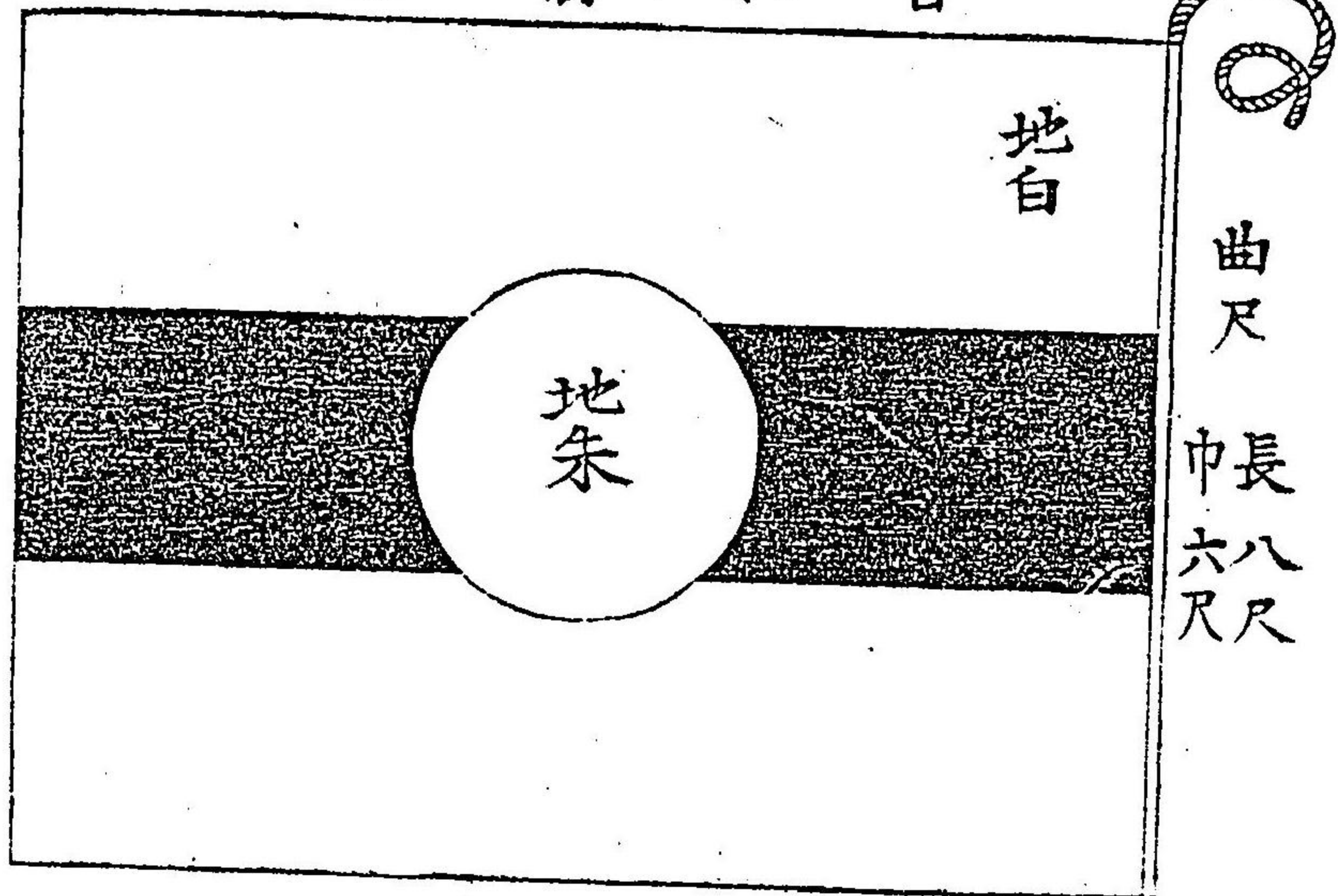
豎 四尺二寸

日ノ丸差渡二尺五寸二分

同先ノ明キ一尺八寸

同乳ノ方明キ一尺六寸八分

日本商船記



曲尺
中長六尺

船名

何國何村何某

所持

寸法

日丸徑尺四尺

上白二尺

中黒二尺

下白二尺

〔東京府〕御觸 正月廿七日

一町々家作の儀類焼防の爲め土藏造塗屋等よ可致旨先前より
 布令も有之處兎角等閑よ相心得今よ至り右様の家作ハ稀々
 よ付趣意不行届不本意の至りよ候向後ハ聊も餘力有之者可
 成丈士藏造塗屋等よ致し往々火災の思相遁候様可心懸事
 但通例の家作よて表面形容のみの塗家よてハ火災の節防
 よハ不相成却て怪我等有之不宜候間實々力よ不及ものハ
 通例の家作よて不苦候事

一往還大道筋ハ勿論横町裏町共猥りよ張出建足し等致し道
 八間の處ハ七間又ハ六間余よ相成五間四間の所ハ四間三間
 程よ相減じ候場所不少出火の節通行の妨よ相成消防の手宛

存分難施其害不少候條新規家作ハ勿論古家たり共地伏外道
敷へ掛け山等追々取除可申事

一從來火除地として町家取建不相成場所へ晝の間葭簀を張廻
し飴菓子等商ひ夜分ハ取仕舞總て移火の思よ不相成分ハ差
許置候處近頃亂よ相成願濟よも無之本家作よ紛敷分相見且
晝夜共右火除地廣場等よ住居罷在候者も有之哉よ相聞以の
外の事よ候向後右体のもの有之節ハ取拂可申付候條是迄建
置候分も追々取拂候様可致候事

右の趣町中不洩様可觸知者也

〔太政官〕御沙汰 正月廿八日

廣島藩

山口藩

津和野藩

石州濱田縣浮浪の徒煽動致し土民津和野不容易趣よ相聞へ候よ
付てハ此後の動靜ヤラサよ依り兵隊差出し知縣事申談じ速よ鎮定致
し候様御沙汰候事

〔太政官〕御布告 正月廿九日

來月四日於神祇官新年祭被行候事

諸官省彈正集議大學并在京府藩縣官員奏任以上午の半刻よ
り同官へ可相詰事

〔太政官〕御布告 正月廿九日

從來着服の輩忌濟の節除服出仕宣下有之候處自今前以忌服何

四廿

日迄と相届置忌濟の日よ相當り候得バ勝手よ出仕可致事
但忌濟當日御神事中よ候得バ可相憚於重服者御神事並御吉
日とも可相憚事

〔太政官〕御沙汰 正月廿九日

澤外務卿

寺島外務大輔

西班牙國和親貿易條約取結の全權御委任被仰付候事

〔太政官〕御布告 正月

刑法新律追て被仰出候得共差當り財産沒籍の法被爲停度思食
よ付各地方官よ於ても御趣意を奉體可致旨御沙汰候事

〔太政官〕御沙汰 正月

刑部省

財産沒籍の法と停止候建議の趣御採用よ相成別紙前文御布告を云ふ
通地方官へ御沙汰よ相成候間此旨相達候事

〔太政官〕御達 正月

作年凶荒よ付奏任官以上官祿獻納被爲聞食届候處今嚴官祿渡
方左の通御治定御救助よ被宛行候間自今獻納よ不及候事

勅任官

總て金渡

奏任官

十分の一現米渡

判任官

五廿

六廿

十一等より十三等迄十分の三現米渡十四等以下十分の半
米渡

但米一石相場八兩立の事

〔太政官〕御達 正月

東京府

近年諸色并手間運送賃共都て格外高直よ相成候よ付てハ當午
より五ヶ年の間役船御用相勤候賃銀ハ御定の直段へ七割増加
へ御拂下げ相成候よ付船冥加上納役永錢も右よ准じ七割増御
年貢錢計り上納の船ハ二倍增日除船ハ一倍増を以同様年限中
可爲上納此旨東京并關八州川筋へ乘入相稼候船所持の者へ不
洩様可爲觸知者也

〔太政官〕御沙汰 二月二日

兵部省

其省自今造司被置候事

〔太政官〕御沙汰 二月二日

岡山藩

北海道後志國島牧郡の内へ「かちし」より東の方じやめくしな
迄

右其藩支配よ被仰付候事

〔太政官〕御布告 二月三日

七廿

是迄諸願伺届等よ辨官御役所と相認出候分向後辨官御傳達所
と可稱事

〔太政官〕御布告 二月三日

出火之節出役の外馬上にて其近傍へ乗込候儀以來禁止候事

〔太政官〕御布告 二月三日

府藩縣公廨自今総て何府何藩何縣廳と可稱事

但支配地下方より差出候諸願伺等ハ某役所と認め不苦候事

〔太政官〕御布告 二月三日

來る七日西班牙國使節參朝候間此旨相達候事

〔太政官〕御沙汰 二月三日

京都府

其地兵部省被廢候よ付成兵自今其府よ於て可致管轄事

〔太政官〕御布告 二月五日

華族自今元服の盡齒を染齒を掃候儀停止被仰出候事

〔太政官〕御布告 二月五日

列藩華族隱居有位之輩御一新以來未だ參朝不致向ハ來三月中

朝覲可致旨被仰出候事

但極老參覲難相叶輩ハ其旨可申出候尤精々輕裝よて可罷出

事

〔太政官〕御布告 二月五日

京都よ有之候諸藩の邸宅地所近來往々荒蕪よ相成候場所不少

趣右ハ全く地方を廢棄し候儀よ付不用の向ハ桑茶等植付地力

を盡し候様可致不及其儀分ハ賣拂候歟又ハ上地致し候歟孰れ

とも取極早々京都府へ可申出事

卅

但拜借地の分へ返上可致事

〔太政官〕御布告 二月七日

来る十三日於本丸練兵天覽被仰出候事

但雨天候ハ、十四日の事

〔太政官〕御沙汰 二月八日

京都府

各通

大坂府

宮(大坂へハ宮)華族士族邸宅地所自今其府管轄よ被仰付候事

〔太政官〕御沙汰 二月八日

留守官

宮華族是迄之通其官支配被仰付候事

〔太政官〕御沙汰 二月九日

神祇官

別紙二十九社奉幣祭典御再興よ付式目委細取調候様御沙汰候事

大奉幣

出雲 大社 熱田 宇佐 鹿島 香取

大祭

加茂 下上 一の宮 氷川 石清水 春日

中奉幣

香椎 宗像 日吉 三輪 大和

一卅

中祭

八坂

北野

小奉幣

太宰府

廣瀬

石上

廣田

住吉

小祭

松尾

大原野

吉田

平野

稻荷

梅宮

貴船

〔太政官〕御沙汰

二月十日

大 學

天文曆道自今其學管轄被仰付候事

土御門和丸

幸徳并從四位

天文曆道自今大學管轄被仰付候間此段相達候事

〔大政官〕御布告

二月十二日

府藩縣よ於て驛程諸關勘合其他小事件々相用候印鑑

何府	何藩	何縣
----	----	----

方一寸

五分

右の通彫刻可致事

但是迄藩印定寸を以て藩よ於て彫刻致し候分ハ消印可致事

〔太政官〕御沙汰

二月十三日

關拓長官

樺太地方之儀ハ別よ使被建候間自今不及管轄候事

四州

〔太政官〕御沙汰

二月十三日

留守官

當年遷幸之上大嘗會被_レ爲_二執行_一候旨昨秋於_二京都府_一布告_レ相成有_レ之候處未々綏撫之道不被_レ爲_二行届_一加之諸國凶荒奥羽_レ於_レて_レ皆無同様國用巨多勞以遷幸御延引被_レ仰出候間右之趣布告可_レ致候事

〔東京府〕町 觸

二月十三日

近年諸色并手間運賃共都て格外高直_レ相成候_レ付て_レ當午年より五箇年の間役船御用相勤候賃銀_レ御定の直段へ七割増加へ御拂下げ相成候_レ付船賃加上納役錢も右_レ准_レ七割増御年貢錢計上納の船_レ二倍増日除船_レ一倍増を以同様年限中可_レ爲

上納_二此旨東京并關八州川筋へ乘入相移候船所持のものともへ不_レ洩樣可_二觸知_一者也

〔太政官〕御沙汰

二月十五日

外務省

開港所規則稅額等區々_レ相成候趣_レ付其省より巡視取締可_レ致旨御沙汰候事

〔太政官〕御沙汰

二月十七日

東京府

元輪王寺宮家來東京在任之分並元東叡山目代手代以來其府_レ於_レて_レ轉_レ可_レ致事

五州

但右之者共身分御處置之儀_レ追て御沙汰可_二相成_一間委細取調

可_二申出_一事

〔外務省〕御 達

二月十八日

近來外國人を雇入各般使用よ供候向有_レ之右者兼而御沙汰之通願濟之上者不_レ苦事よ候得共雇入方不案内より疎漏之約定よをよひ或ハ其雇入へき人物之撰方精細ならず後來不都合之趣追々相聞候間大略之心得方別紙を以布告をよひ置候凡右を標準といた_レ可_二願出_一廉々者其手順を失_レざる様可_レ被_二相心得_一候依而此段申達候

外國人雇入方心得條々

一外國人よ接對するハ信義を第一となし皇國聲譽之を失_レざる様心懸くへし乍_レ去其雇入るゝよ當てハ兼而當人學術之淺

深人物之可否熟知之上其相談よをよふへし東洋諸州へ來る外國人之内よハ誕妄輕浮之徒なきよわらず多くハその物色行届かず疎漏之傳聞等よまかせ或ハ彼の虚誇自負を信用し其雇入るゝ用筋よ適當せざる事ありて徒らよ給料を費候趣追々相聞候間再三吟味之上雇入可_レ申候事

一願之上外國人雇入候節は其もの之身分よより外務省又ハ開港場之官員より其雇入候國之官吏へ申達置へく候間雇差免候節ハ其段届出へき事

一諸學科よ付相雇候上ハ其學術専門よ使用可_レ致候外國人之内其私利を貪り專業之外日本内國人と引合商賣等相營度旨願出候とも差許へからず且外國貿易之周旋いた_レ密商ケ間敷

僱有之よれぬてハ當人者勿論雇入置候も此迄御咎可有之旨
兼而約定可致置事

一雇入候よ付而者右使用之年季給料并其給料渡方之前後及支
度金等諸勘定向後日議論無之様發輝と取極置可申事

一外國之振合年季約束中よ破談いたし候節者多くハ其年限丈
け之給料渡遣候由よ付右之心得を以成丈け長年季よ不致使
用之上出精いたし爲筋よも相成候ハ、其節よ臨繼年季可申
談候事

附暇さし遣候見込之ものハ凡半ヶ年前か一ヶ年前よ其旨
當人へ相達置へき事

一相雇候節當人屋賃食料家具筆墨紙等之入費ハ勿論小遣賄方

之もの共迄月給之内を以可相辨筋之品と雇主よ可ある時者
年限中といへとも暇を遣ハす事當然なり然れとも其取置を
證し得るよあられハ其論立さるなり右屬入費との區別前
以判然取極置約定可致左もなき時ハ月給之外雇主之方よて
余計之入費相掛り候事と知るへし

一月給其外拂渡候節ハ必ず横文よて請取之證書取置能收藏い
たし置へし尤横文之譯謬なき様取調候而後日之ため用意す
ること肝要なり

一雇年季之内彼方勝手を以暇を乞候節ハ彼方約定異變之筋よ
付篤と其暇と取候事實相糺候上よ而給料差引方等相當之處
置可施候事

一 不勤よて數日之間其職をなさざる節ハ雇さし免す趣并酒色
よ耽る如き放蕩之所業あつて雇入たる本業よ妨げ等ハ前以
約定書よ掲置而已ならず其證を得たる後其談よ可及事

附奉職時間或ハ休日之定め并長病相煩候節之取計方迄約
し置へき事

一 暇さし遣候上引渡方ハ其雇入候場所則各開港迄送歸す手續
と相心得へし其當人本國へ立歸り候迄之旅費者不渡遣旨前
以約し置へき事

一 外國人身分之階級よより接待方之高卑も可有之候得共兎角
其支配之もの之差圖方よより折合よろしからざる事出來勝
之もの故前以誰々之差圖よ隨ひ可相勤旨兼て約束可致置事

一年月者總而日本之曆數を用ゆへし彼方よ取不便之ものハ皇
曆之次へ西曆を出してよし雇季月等も同様たるへし

一 住居之た免之家作を賣渡候とも地所貸渡候儀不相成後日暇
遣し候節議論不起様兼而處置可致候事

一 外國人雇ハれ中病死いたし候ハ、相當よ葬禮を營可遣尤孤
獨よて立會之者無之節者病氣容體よより可成丈遺狀等爲
認置且其衣服調度を初當人所持すへき品々は瑣細之ものよ
至る迄目錄よいたし其雇元へ可掛合且外務省へも相届其時
宜よより差圖可受事

一 民政開拓筋よ關係之事ハ民部省へ伺之上其事よ可取掛銃砲
操練等軍務よ關係之事ハ兵部省へ伺候上其事よ可取掛外國

人雇入方御差許相成候とも其取掛る事柄より其筋よ差支
なれども難計多れハ兼而其心得有へき事

一 外國人相雇發明利用之功績相顯る、節者其段明細よ書記
其筋關係之本省へ相届可申事

一 雇入候外國人其雇場所より他出ハ容易よ許すまじき筋なれ
とも止むを得ず旅行爲致他支配之地通行之節者護衛差出共
筋々へ掛合及へき事

一 彼方宗門よ付獨自禮拜ハ勝手次第たるへし此方之ものへ説
導少間敷儀決而爲致まじく尤互よ宗門之事よ付決而論議い
たすまじき事

右之通相心得其余者類を推して知るへし

〔太政官〕御沙汰 二月廿日

若松縣

其縣先達て巡察使を被置按察使管轄外よ有之候處此度七州諸
藩縣同様按察使管轄被仰付候間此段相達候事

○

按察使

若松縣自今七州諸縣同様管轄被仰付候事

〔太政官〕御沙汰 二月廿日

兵部省

在京之諸藩兵京都府よて管轄致候處自今其省出張所よて管轄
可致様被仰付候事

〔太政官〕御沙汰 二月廿日

仁和寺宮自今東伏見宮と稱候事

〔太政官〕御布告 二月廿二日

書籍新刻免許之儀是迄大學よて取扱來候處自今大史所轄よ被仰付候間向後新刻願書史局へ差出可申事

〔太政官〕御布告 二月廿二日

府藩縣よ於て會計融通の爲外國より金銀借用之儀ハ勿論外國の器械船艦等買入よ付其歲入又ハ物産類都て未定將來之品を引當よ致し相求候儀決て不相成候事

但農商之輩互布よ付互よ手附金等請取渡致候儀ハ官府よ關係不致^カ本文之趣とハ自ら差別有之間右と混淆不致様相心得

可申候事

〔太政官〕御沙汰 二月廿二日

外務省

別紙之通被仰出候間各國公使並岡士へ可申入事（別紙ハ前御布告也）

〔太政官〕御沙汰 二月廿二日

大史

紅葉山文庫の書籍是迄大學へ被附置候處自今其局管轄よ被仰付候間請取可申事

同上

書籍新刻許可の儀是迄大學よて取扱來候處自今其局所轄よ被

仰付候事

大學

紅葉山文庫の書籍其學へ被附置候處自今大史管轄よ被仰付候
間引渡可申事

但右書籍の内諸官省へ差出又ハ教官稽古人等拜借の分一旦
悉く取入れ書目の通取揃引渡可申事

○

同上

書籍新刻許可の儀是迄其學よて取扱來候處自今大史所轄よ被
仰付候間此段相達候事

〔太政官〕御布告 二月廿七日

相摸國津久井縣自今津久井郡と可稱候事

〔太政官〕御布告 二月廿七日

今般大和國よ五條縣被取建候事

〔太政官〕御布告 二月廿七日

諸官員並宮華族の家士及諸藩士等府藩縣管轄地在留の向き其
府藩縣支配下へ相係り候公事出入有之節以來其府縣より主宰
へ一應掛合の上本人直よ呼出し取扱候間爲心得相達候事
但諸官員奏任以上家來判任以下本人呼出候事

〔太政官〕御沙汰 二月廿七日

兵部省

今般大和國よ五條縣被建候よ付其省十津川出張所被發候間此
旨相達候事

〔太政官〕御沙汰 二月廿七日

諸官省

諸官省官員進退月々十日より届出候處自今判任以下過夫等有
之差免候分ハ其節々可届出事

○

同上

諸官省よて官員差免候節ハ其貫屬府藩縣へ相達可申事

〔太政官〕御沙汰 二月廿七日

各通 留守官

京都府

落中外境界御改正より相成洛中へ從前の通地子免除被仰付候事

〔太政官〕御沙汰 二月廿八日

大學

大坂府醫學校病院自今其學管轄被仰付候事

○

同上

長崎縣病院學則並學職人員進退の儀自今其學管轄被仰付候事

○

大坂府

其府醫學校病院自今大學管轄被仰付候間此旨相達候事

○

長崎縣

其縣病院學則並學職人員進退の儀自今大學管轄被仰付候間此

旨相達候事

〔太政官〕御沙汰 二月廿八日

神祇官

賀茂社其外臨時祭名稱不相叶儀より付自今被止候事

但叡慮を以時々奉獻可被爲在間此旨可相心得候事

伊勢兩宮重き御祭典式目委細取調候様御沙汰候事

〔太政官〕御沙汰 二月廿八日

同 上

東京府

各通 神奈川縣

品川縣

馬車の儀近來路人を怪我爲致候事不少以の外の事候就てハ
市中ハ勿論街道筋ハ於て狹隘混雜の場所ハ馳驅を禁じ以來不
都合之儀無之様屹度取締可致事

外務省

馬車の儀ハ付別紙（別紙ハ前御達を云ふ）之通御沙汰相成候間其振合を以

各國公使へも可申入候事

〔太政官〕御沙汰 二月廿八日

彈正臺

各通

留守官

先般御達相成候彈例更ハ御取調之儀有之候付追て御沙汰候迄
御取停相成候間此旨相達候事

〔太政官〕御沙汰 二月廿八日

成田從七位

勤仕中勵精の段神妙の事ハ候依之目錄の通下賜候事

目錄 金百兩

〔太政官〕御布告 二月廿九日

延喜式神名帳所載諸國大小之神社現存之分者勿論衰替廢絶之
向式外よても大社之分或ハ即今府藩縣側近等よて崇敬之神社
取調可届出ハ兼て御布令之通ヨ候處差向官幣神社之分詳細取
調當九月限無遅滞神祇官へ可差出候事

但各社同名所在混雜不分明之社ハ精々逐穿鑿其上難相分向
ハ巨細書取を以同官へ可伺出事

一諸國大小之神社神職繼目同新補別當社僧復飾神勤等是迄神
祇官へ願出許狀請來候處追て一定の御規則被仰出候迄同官
直支配之外ハ地方官よて開濟置取束可届出候事

但本文御達し不相達以前出京致候向ハ夫々地方官へ添書

致し可差戻事

〔太政官〕御布告 二月廿九日

不開港場規則難船救助心得方等之條目別紙雕刻之通被仰出候
間此旨相達候事

別紙

外國貿易之儀ハ神奈川港を初大坂兵庫長崎新潟箱館六ヶ所御
取開相成候上ハ諸商賣とも右場所おいて取引可致處不開港場
あつて密商いたし候哉之趣相聞以之外の事ヨ候右ヨ付而者先
達而御布令之趣も有之御條約面にも明細ヨ掲載致し有之儀ヨ
付向々あつて厚可相心得筋ヨハ候得共津々浦々邊鄙之場所ヨ
至候而者取計方不相辨ものも可有之或は難船救助之筋と入混

し難船人へ對し不親切之取扱いたし候而者御交際上よ差響候
 儀に付夫是以今般猶又廉々別紙之通心得方被仰出候依而者府
 藩縣におて取締不行届其土民共外國人を引入れ内密賣買致し
 候節へ仮令其事不仕遂候共當人並其支配たる者まで急度御答
 可被仰付候尤吟味之上其土地管領之もの同意致し居候歟又ハ
 心得なから見遁し候儀相知れ候節へ猶更嚴重御處分可有之候
 よ付向々おて取締之儀猶一層行届候様可致候事
 一外國人之儀自己相對を以雇入候儀不相成趣者兼而御布令之
 通よ候得共諸學料又者國地開發或者西洋形之船々運用筋よ
 付相雇度者ハ其次第よより御間届可相成候間給料年限等取
 極其筋々より書面を以東京外務省へ可願出其上御印章御渡

可相成候尤御印章所持之外國人者何れの向よ而も御國人同
 様相心得無_レ意_レ接待致し無_レ差支通行せしむべく候尤諸場所
 よ而右御印章相改可_レ申萬一右御印章所持不_レ致外國人有_レ之節
 者御許容不_レ相願私に雇入候筋よ付内地通行不_レ相成儀者勿論
 竊よ隠し置相顯る、よ於て者急度御沙汰之品を可有_レ之間心
 得違無_レ之様可_レ致事

午正月

太 政 官

追而別紙條目之儀者外務省よ摺もの有_レ之候間不足之向者
 何部よても同省へ申立可_レ受取候事

條目

不開港場取締心得方規則

一何れの濱邊又者港浦あゝて西洋形之船入津候ハ、時刻を移さず直様港役人長之内より可罷出事其船へ乗組入津之趣意可相尋事

但言語不通よて十分難相分儀も可有之候得共初て來る外國船ハ故なく入津いたし候儀甚少候間其大意丈け和語手具似よて相分可申候事

一尋問之上薪水食料よ盡き其品々を求候ため入津之儀よ候ハ其土地より横濱兵庫長崎新潟箱館迄之里數を勘辨いたし格別遠路にも無之候ハ、右品々たりとも前文開港場之内へ參り可受取旨申さとし渡方を斷り可申或ハ右開港場へ七八十里又ハ百里も遠き場所よ候ハ、無餘儀事よ付其土地支配

よて承届候上右里數を計り船中人數相當之分丈渡遣し代金可受取事

但金高品數ハ勿論船之碇泊日數刻限等委細相認届出可申事

一其船之國名船名船主之名書付よて承り糺すべき事

但船名者多く船之艦よ横文字よ楷書よ相認有之ものよ付右字樣寫取置へさ事

一船よ引上げ有之國旗並船主之旗等總而目印よ可相成ものハ其雛形寫取可差出事

一調乏之品相渡候上出帆遅々致し候様子よ候ハ、早々出帆候様催促可致事

一 御免許之上海岸測量ため船をよせ候節ハ相當ノ世話いたし
岩石隠れ洲有之場所等差示可遣尤御免許之船ハ其印狀必ず
所持いたし居候事

一 軍艦ノ候や商船ノ候や蒸氣船風帆船共總相船形大小とも取
糺相届可申事

一 軍艦ノ候よ、大砲之備有之商船トハ船形相違ノ付假令見な
れざるものよ而も相知れ可申軍艦ハ別而何事も禮義を正し
不敬之取扱いたさる様可掛心候事

一 薪水食料等船中必用之品之外除分ハ勿論其外土地産物類相
求度旨申立候とも一切賣渡候事不相成萬一利慾ノ迷賣渡候
者有レ之後日相顯ハる、よたおてハ吟味之上訖度御答可有レ之

事

一 船中に積載有之品々彼方より賣渡度段申立候とも買求候儀
是又一切不相成萬一筋ノ取引いたし候節ハ前同様御答可有
之事

一 濱邊ノ近き村里之もの共其濱邊之もの共内々外國人ト荷物
之取引致し候様子ノ候ハ、其支配か又者開港場へ可引立時
宜により御賞可有之事

一 難船に無之食料闕乏等ノ托し密商仕向候節ハ定而其土地よ
と右を呼迎候者可有之速ノ探索之上彌密商いたし候ノ相違
無之候ハ、雙方ともさし押外國人者引留置御國人ハ入牢手
鎖等其土地相當之仕置よいたし早々申立差圖可受尤横文字

之書付類後日之證據（エビデンス）可相成品（製品）ハ始末いたし可置事

但各國御條約書（条約）何れも外國人共日本不開港場等へ參り
密商し或ハ密商を企てんといたし候者ハ其犯せる度毎（度）其品取上げ爲過科（過料）めきしことるらる（らる）而千枚に當候程御
取立相成候間御國人（御國人）於而も右同様之企致（企て）し候もの於有
之者兼而御布告之通其品取上過科として金千兩御取上之
事

一御國人買求候西洋形商船（西洋形商船）外國人乗組居萬一商買取引等致
し度段申立候歟或ハ其乗組御國人手引（手引）よて商買致し候様（様）相見候ハ（相見候）篤（篤）と様子を探索致し嚴敷拒絶（拒絶）可致萬一仕逐候跡
ハ候ハ、其事實穿鑿（穿鑿）之上早々其筋へ可申立事

但本文西洋形商船（西洋形商船）不限御國通例之地乘船（乗船）ハ面西洋人乗
組居候節も同様之事

一外國船を御國人（御國人）とも借り受開港場（開港場）より開港場へ荷物運搬之
儀ハ願之上御聞届可相成筋（相成筋）ハ候得共不開港場へハ決而御聞
届無之儀（儀）ハ付萬一不良之徒村民を欺き御免許受候（受候）ハ付賣買
致し度杯（杯）と申唱へ候とも一切差許申問敷事

但地方鐵體筋（鐵體筋）よて不得止事外國船相雇不開港場へ相廻り
候事御免許無之筋（筋）ハ無之其節ハ府藩縣之知事より其沙
汰可有之且乗組人之内開港場之役人爲取締立會居候筈（筈）ハ
付事實突留候上其取扱（取扱）ハ可及事

一淺ハ碇泊（碇泊）いたさず沖繫り又者其近海（近海）をいて雙方之船出會

致密商候様子も候は、是又早々穿鑿可致事

一 不開港場へ外國船碇泊いたし薪水食料而已致渡候儀より而聊心障り之事無之とも其都度相届可申事

難船救助之事

一 難船より面困苦之體より相違無之節は其困苦之輕重より隨ひ相當に扶助いたし可遣事

但船より乗組居りかたき程より候は、其海岸最寄寺院也民家也可然場へ止宿爲致食料衣服等迄仕賄可遣事

一 船之修復より取掛り候は、鍛冶大工職其他人夫は勿論器材迄用意致し可遣事

一 人之内溺死之尸有之歟或着滞留中病死之者埋葬之儀申

立候は、墓所の内都合よき場所へ埋葬可爲致事

一 洋中を以て大船破摧し乗組外國人の内猶船具等より取付生殘

り居候體見當候は、早々我船へ助け載開港場へ送届候歟又者其土地支配之者へ引渡其支配之者受取海陸便宜を見計開港場へ可差送事

一 難船漂着候は、早々外務省歟又ハ開港場之内可成里數近き所へ晝夜より不限注進よ及其掛り官員の出張を申立差圖可受事

一 難破いたし船難用立陸路より開港場へ罷越度段外國人より願出候は、承届附添の者可成餘計よさし出最寄之開港場へ可送届事

一 困難之船隠れ洲等に乗懸け難引出其儘船主引拂候節右船
津又ハ鐵具破鎖等迄沈没のま、追々流失候とも又ハ村方
而取捨候とも向後異存なき旨外國人より横文の書面取置
き事

一 難破の船津其ま、差置外國人ハ一旦引拂追々右船引出し方
として再可差越候よ付其間船其外之ものとも預り置くれ候
様外國人より相頼候とも容易よ引受申間敷彼方より難面申
立候ハ、其筋へ伺之上可引受勿論入費可相掛儀よ付右貨銀
受取候儀ハ不及申跡々よ而異論不差起様何事とも書面可取

置事

一 困難救助よ付候入費之立方者御國民難船いたし度々外國人

よ被救候事も有之雙方相互の事よ而天災之儀よ付土地之入
費よ相立候事相當よ有之候乍去船修復又ハ滞留日數長候節
ハ土地難澁よ及候儀よ付最初より之諸勘定互細よ相認外國
人より其都度見留印を受一と句切り毎よ受取可申尤當人持
合せ無之候ハ、證書取置開港場へ送届候節其裁判所へ差出
可申尤時誼よ寄總て土地入用よ相立外國人より不取立筋よ
相決候ハ、其府藩縣之入費よ可相立勿論いさいの事ハ類列
も有之儀よ付外務省又者開港場掛り官員よ相届仕譯けを可
受事

一 難破之船具又は沈溺の荷物或ハ船津等賣拂度旨外國人より
申立候ハ、右ハ相當之價を以買求候儀不苦尤其段可相届事

一難船よ而永々滞留可相成様子よ候ハ、府藩縣とも其筋より警備のもの可差出事

一乗組人無之西洋之難破船海岸へ漂着候ハ、其様子いさいよ可相届事

一總て外國人よ取引いたし候勘定書或ハ證書の類よ至迄和文よてハ難用立候よ付彼國之文字よ而爲相認書き判又ハ調印爲致置へし和文よてハ後日之證と難相成候此方より可差出證文等有之候ハ、和文よ相認右へ調印いたし可差出彼方より望候とも意味不相知西洋文へ調印は勿論名面認裁候儀不相成被欺候儀有之候とも後よ其詮無之事と可相心得候事
一右條目よ有之伺出候儀又ハ届書とも其場所より最近き開港

場敷又ハ東京外務省へ差出候事と可相心得勿論事柄永引き手輕よ不相濟儀ハ開港場へ相届候上猶又外務省へ可申立事
右之通

午正月

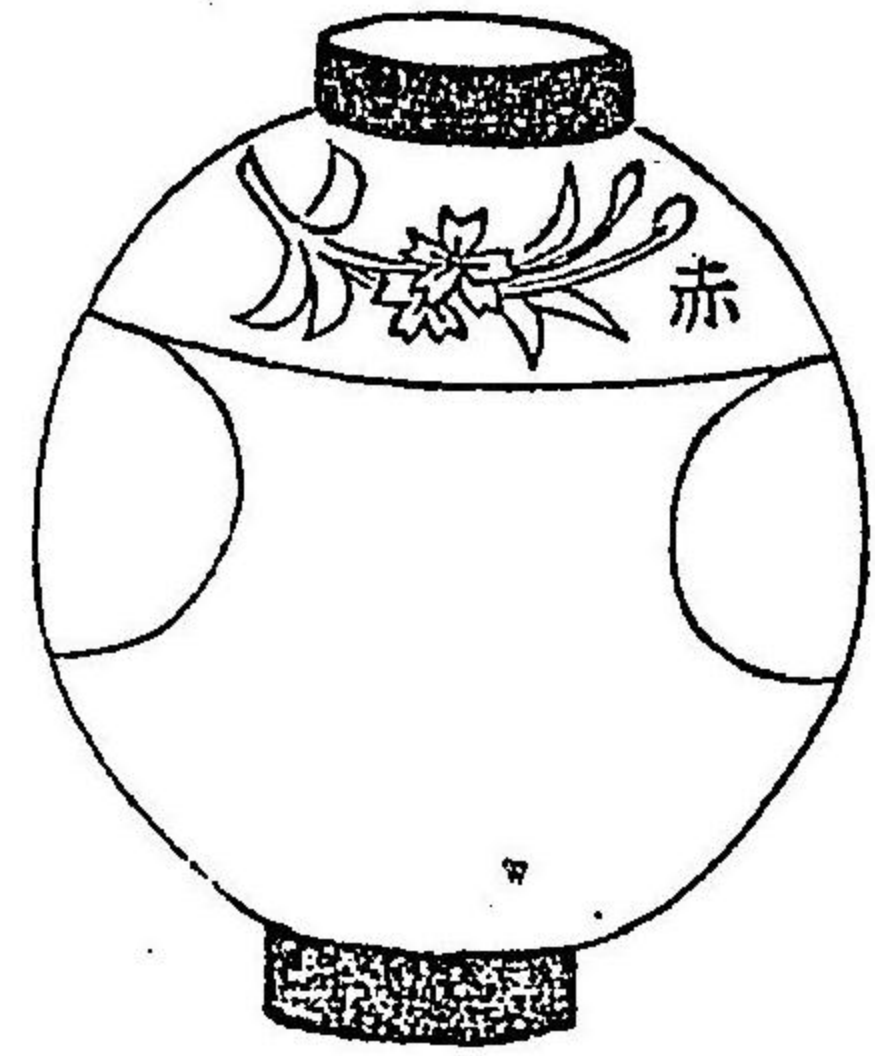
〔太政官〕御布告 二月廿九日

禁中大宮中宮等官女挑灯の印別紙圖面の通御定相成候間府藩縣一般紛敷印一切不相成候事

自分紋黒三處以下同じ

紋より上と赤くす

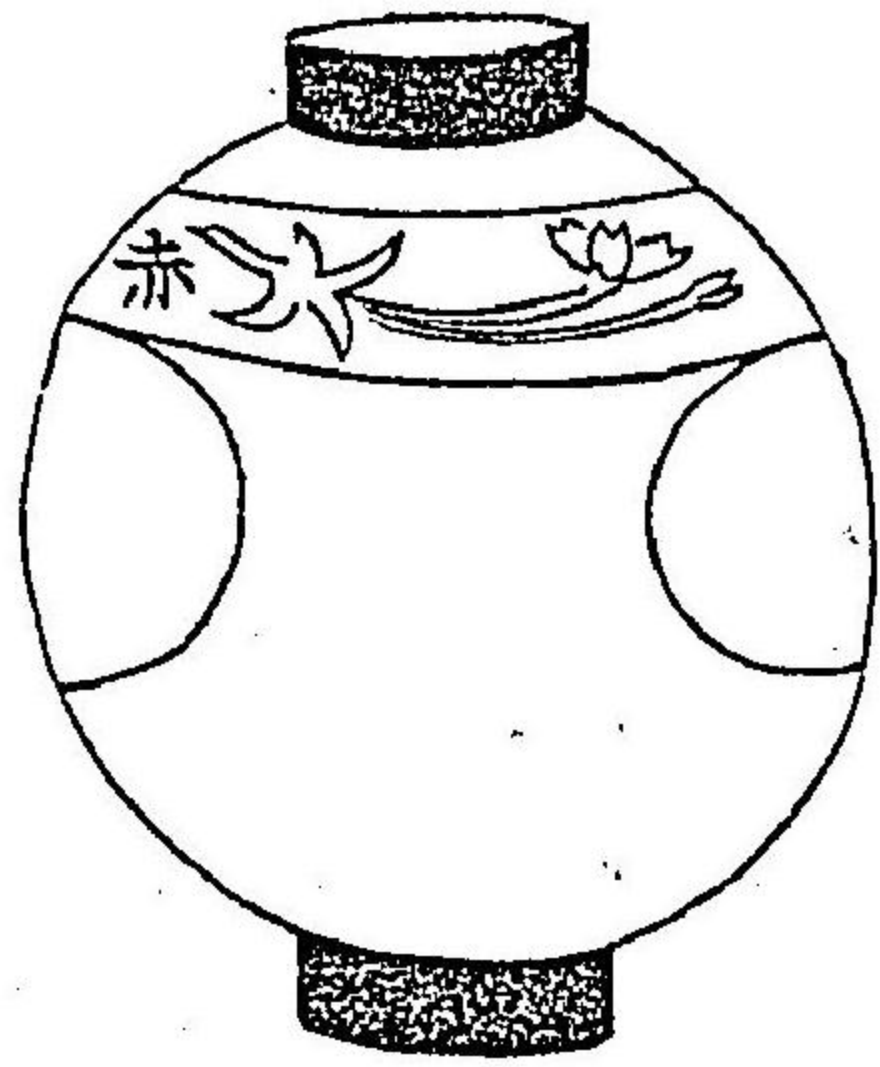
女宮等上



櫻白一處雛形下圖の如し

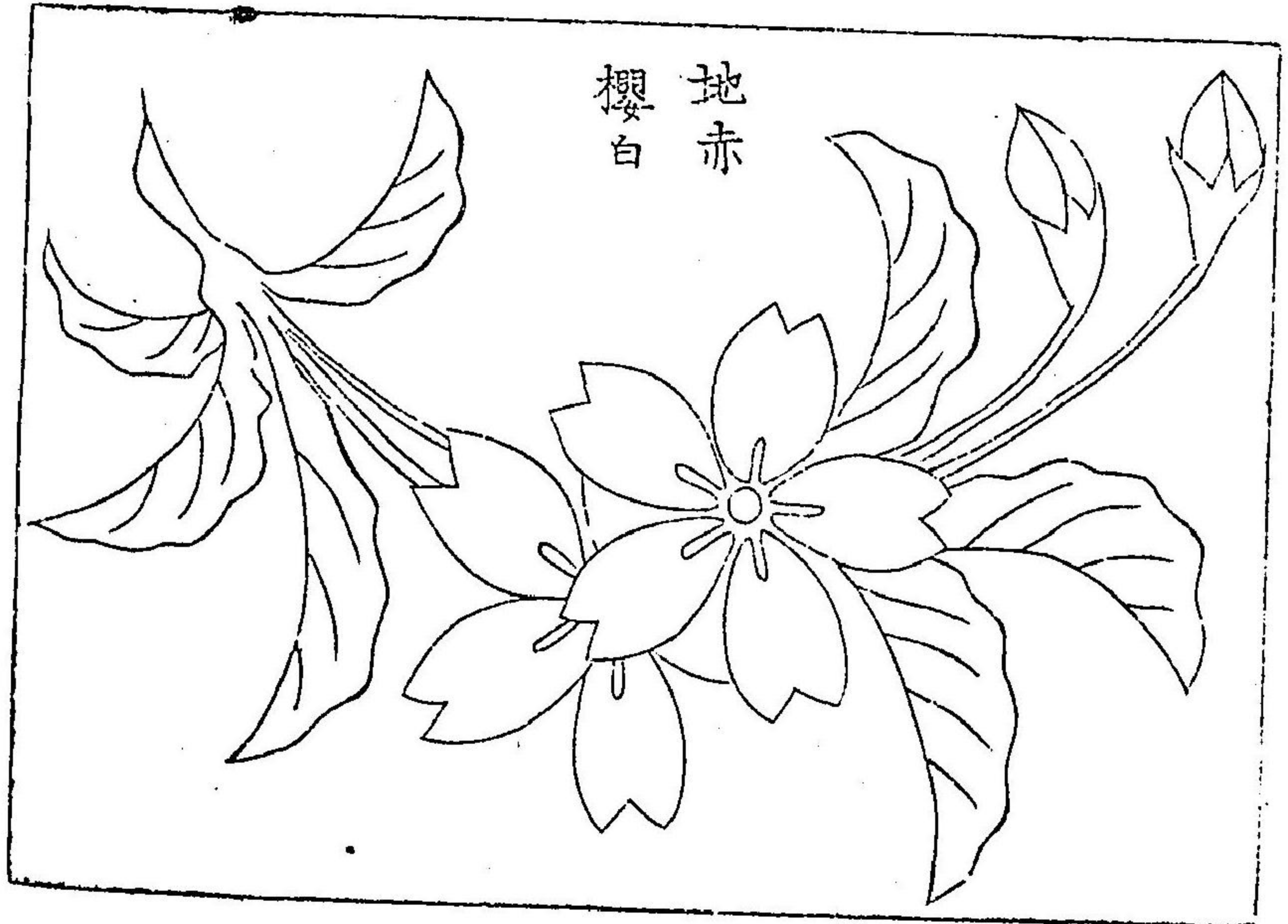
女宮等中

紋より上其の中バと赤くす

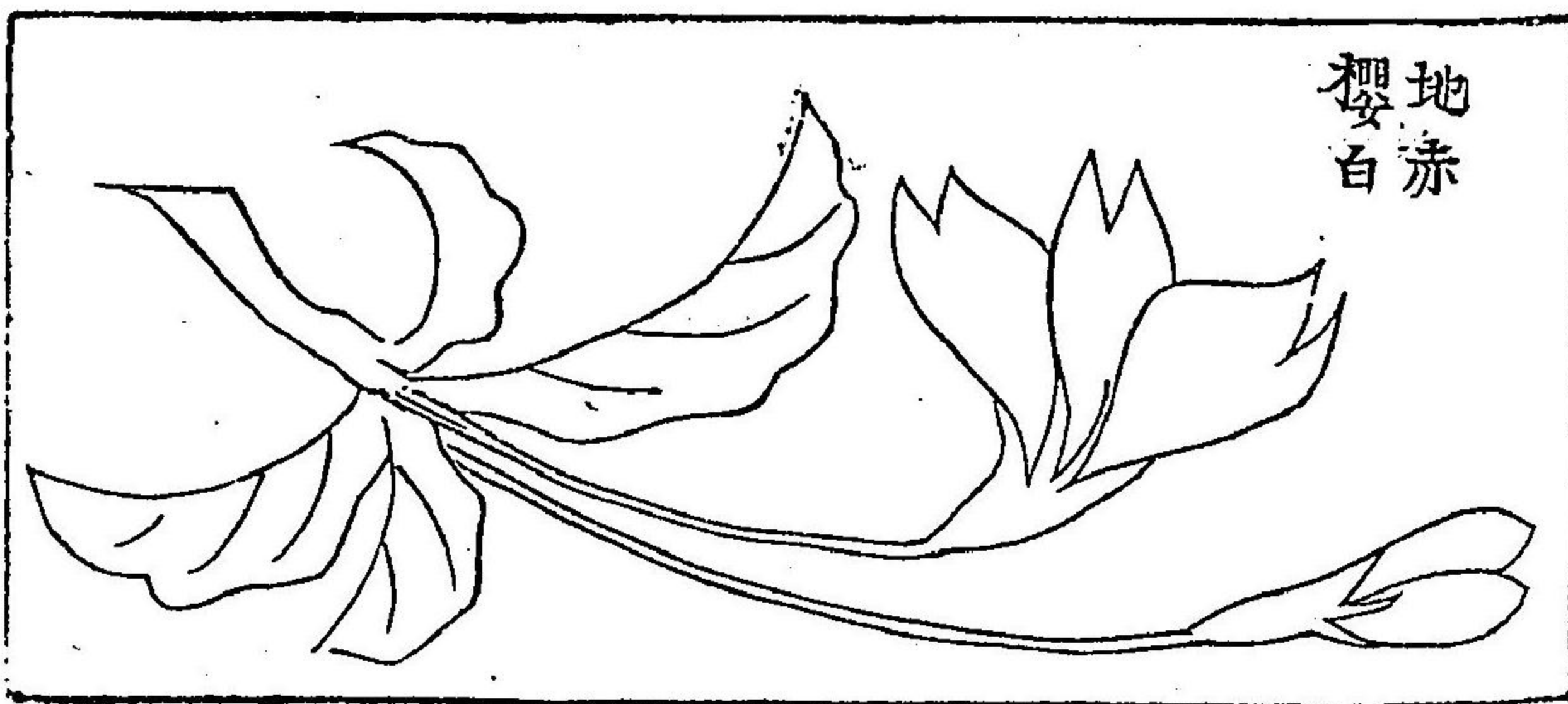


櫻白一處雛形下圖の如し

地赤
櫻白

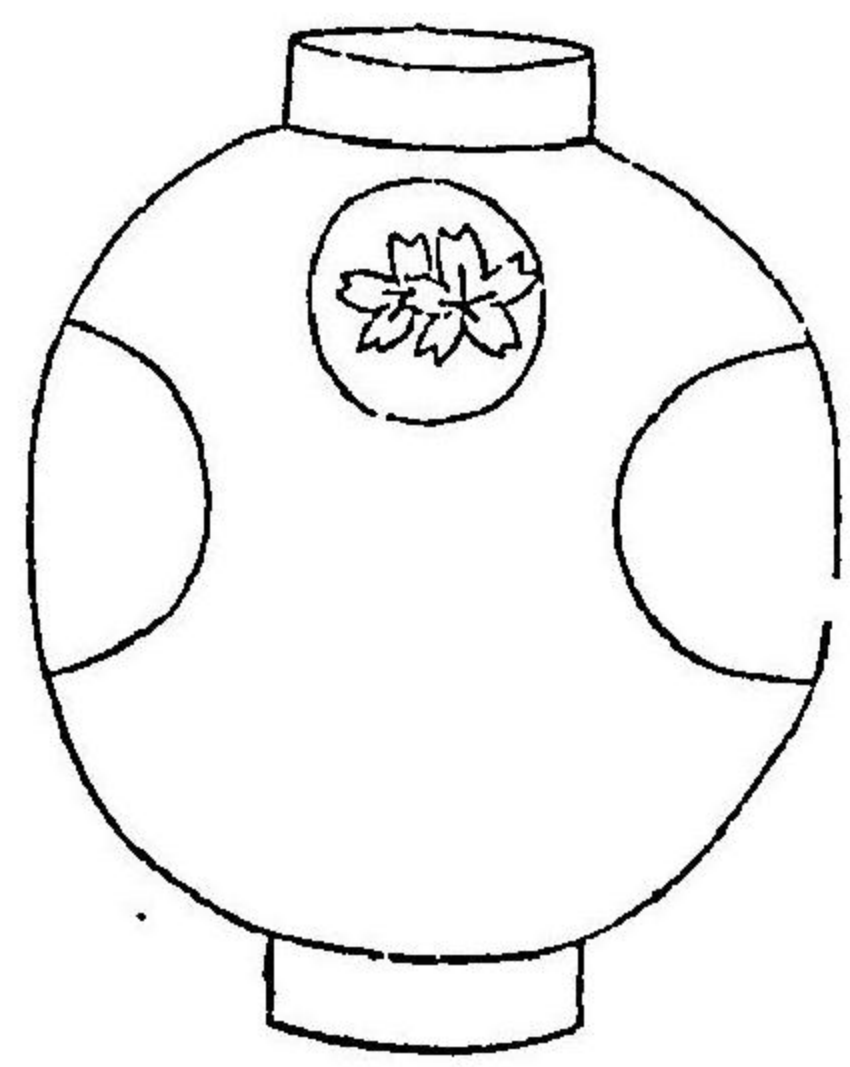


地赤
櫻白



印赤丸一處徑り貳寸

女^メ 宮^{ミヤ} 等^ト 下^カ



櫻白雛形下圖の如し



〔太政官〕御布告 二月晦日

宮華族其他名目を以金銀貸附候儀不相成旨兼て御布告之趣も有之候處今以て内密取扱候向を有之哉よ相聞へ以の外の事も候向後右様之者於有之の糺之上屹度可被及御沙汰候條心得違無之様可致更よ被仰出候事

〔太政官〕御布告 二月晦日

諸府縣職員録別紙雛形之通知事以下史生迄を一冊として來る三月中可届出候猶以後判任進退達と濟之分雛形之通相認毎月可届出事

但過失有之節差免漂分ハ其節々可届出事

雛形

何府職員錄

年干支月日叙 華族或何藩士

同任 位姓名 苗字

元何藩或何國何郡村處士

同任 姓名 苗字

通稱何某

判任進退届

元何藩士或何國何郡村處士

苗字通稱 姓名

等外ハ可役申付候事

任何官

何月何日

苗字某官

通稱姓名

等外ハ何役差免候事

免本官

何月何日

右之通何月中判任進退御届申候也

何府縣

〔辨官〕廻達 二月晦日

諸官

過日公事出入之儀御布告相成候處御取消相成別紙之通更ハ被

仰出候仍て申入候也

諸官員並宮華族家士及諸藩士等府藩縣管轄地在留之向き其府藩縣支配下へ相係り候公事有之節已來其府藩縣より本人直よ呼出取扱候間爲心得相達候事

但諸官員奏任以上家來判任以下本人呼出之事

〔民部省〕御頒布 二月

養蠶ハ皇國至要の産業よて唯其事を勤むる者の和潤あるのみならず大よ國の資用を増殖するものなれハ追々其術を考窮して各妙手うまいてよ至いたるへき筈なれ共其巧拙よよつて豊凶有之隨て損益も不な少候處近來養蠶場舉て其利を競ふよりして徒よ他の利益を羨む者ハ已れ其術を精ふせず分よ超へ力よ過るの蠶業を營

み却て其産を失ふよ至るの類問々有之哉の趣實たゞの至いたる候畢つまり竟其者の貪慾おごりより生ずるの孽わざいなりと云とをいまだ其學術窮理の依頼標準めあてとすべきものなき故未熟おぼろの輩唯其豊凶ハ天與の禍福とのみ存込遂つひよ知覺の進歩を得ざるハ今日迄の遺漏おぼろよして不な可な忽事おぼろよ候最もとも是迄養蠶ハ婦人の業わざよ屬ぞくし自ら手てよ覽へ心こころよ記す藝術ぎゆつよ齊いそしけれども漸々其事盛大せうたいなれば各一家の本業ほんぎよよも可な相成あひな殊こと更人の原蠶卵げんらんを製するの輩ハ別てこれを研けん窮きゆうし實際を試験しけんしたる自家の手記も可有之問今般遍はんぺんく養蠶場たぬしよ布告し各地風土の差さと養法別べつとに不均廣ふとんく其事を下問かもんし要よを撮とみ萃あを扱あき養蠶の方法はうほうを輯集しゅうしつしこれを頒布はんぷし人々無經むけいの感かんを解ときて有効いうちうの勤つとめよ處ところするの楷梯かいていたらしむるの條各其秘訣ひけつ

繭奥を吐露し左の條件に隨ひ手續書を以て可申立事

條件

一 養蠶室建築の模様氣候温暖の用ひ振日除風ぬけの手當窓戶
設け方

一 蠶卵の手置原蠶卵の撰み方

一 卵の蠶よ化するとき其年桑の様子により遲速おらしむるの
法其遲速よ付ての取扱振

一 白繭を作る蠶黃繭を作る蠶の養ひ方の差違難易

一 蠶の幼稚の時養ひ方別て行届くべきの理桑を用る度數溫度
の加減蠶室の手當

一 稚蠶を桑の花よて飼ふの善惡及雨露よぬる、桑の善惡

一 獅子休より庭起迄休起の順序日限及手當蠶裏の取り捨て様

桑の度數溫度比分量

一 揚方手續繭よなるの日限及繭の播取方

一 繭となりて後蠶のさなきよ化するの日及繭の手置

一 さなきよなりてより蛾よ化するの日限及蛆となるさなきの

因縁

一 蠶卵を紙よとるの仕方溫度の有無

一 繭と化して繭となり繭より蛾となるの日限

一 春蠶の外夏蠶又ハ再出と唱へ卵となりて其年再ハ蠶よ化す
るの因縁

附右二種の卵を製するの法

蠶卵紙一枚半本都厚取よて蛾何個よて出來し其蠶卵數幾粒あるの取調

一右紙一枚の蠶を養ふよ桑何株何駄備ふべきの算當及蠶室の間取蠶具入用の積

一桑樹の種類地味の善悪及培養の法

一凡蠶に障る氣候品物及蠶病の種類因縁

一都而養蠶よ用ゆる道具の寸法繪圖并蠶となり四度の休み起より庭起後の様子繭の圖さなき此貌姐と蛾迄の處を丁寧よ眞寫したる繪圖

但此分の養蠶場一最寄より一通宛よてよろし

右畧るところの條件ハ全其概畧よて各地各種の取扱ひありて

尙洩るの件も不_レ少_レ苦なれハ篇と實地取調書取を以て可_二申立_一者也

〔民部省〕御 達 二 月

府 藩 縣

去々辰年以來其管内驛々附屬村々申付置候處當三月晦日限り差免就てハ不勤村方不_レ少_レ趣相聞如何事よ候問村々ハ勿論其府藩縣まで掛合當七月限濟方相成候様可_二取計_一旨相達候也

〔民部省〕御 達 二 月

府 藩 縣

其管内驛々ハ舊幕府より代増或ハ當分助郷等申付置候内不勤の村方不_レ少_レ驛々難澁之趣相聞以の外ハ候間各管轉於府藩縣篇

と遂ニ示談相互ニ勘辨を加へ當七月限り對談爲ニ相濟候様可ニ取計
目相達候也

大 學 二 月

大學規則

學體

道の體たる物として在らざるなく時として存せざるなし其理
ハ則ニ綱常其事ハ則政刑學校ハ新道を講じ實用を天上國家ニ施
す所以のものなり然ハ則孝悌義倫の教治國平天下の道格物窮
理日新の學是皆宜しく躬取すべき所よして内外相兼ね彼此相
資け所謂天地の公道ニ基き知識を世界ニ求むるの聖旨ニ副ハ
んを要す勉めざる可ん哉

學制

輦轂の下大學一所を設け府藩縣各中小の學を置く皆大學より
頒つところの規則を遵守し材を育し業を廣め國家の用ニ供す
る以て務とす而して大學ハ人文淵藪才徳の成就するところ
之よ入らんとする者必ず先づ其地方の者の課を歴諸學漸く熟
して始て輦下ニ貢進するを獲なり
貢法

生徒凡そ三十歳以下を限り其地方の考課を歴知事證憑を予へ
輦下に貢進するもの之を大學生ニ補一各自好むところの科業
ニ就き博士助教の指揮を受けしむ在學三年を期とし期滿つる
時ハ解額せしめ更ニ新なる者を以て之ニ補す若くハ在學中撰

任せらるゝ者あれハ隨て定額の人員と貢進す其在員の如きハ之を後議ヨ附す

試法

試藝對策の法と立て春秋此二仲月預め日を刻し其減否と對試し優等甲科よ登るあらバ各其條件よ就き反覆討論と遂げ言行相符する者を判定し狀と具し申奏一以て廓廟の採擇よ充つ學費

府藩縣管内石高よ應じ公納せしむ其定額の如きハ之を後議ヨ

附す

學科

神教學 修身學

法 國法 民法 商法
刑法 詞訟法 萬國公法
利用厚生學 典禮學 政治學
國勢學

格致學

星學

地質學

理 金石學

動物學

植物學

化學

重學

科 數學

器械學

度量學

築造學

豫科

醫學 數量

格致學

化學 鑛土植物學

本科

藥物學

原病學

科

解剖學 病屍剖驗學 醫科斷訟法

內外科及雜科治療學兼攝生法

文科

紀傳學

文章學

性理學

舍中條規

一 生徒學よ在る各長幼を以て序とすべし

一 朝第八字より第二字までを正課の時とす皆正課席より列し専ら其業を勉むべし

附正課中猥りよ他席より行べからず

一 事故よより正課等闕席する時ハ其趣舎長へ届出舎長之を其科の教官よ申達すべし

一 門限朝夕第六字を以てし限外出入を許さず

一 外出ハ毎月一六の休暇此日たるべし若し他よ一宿せんとする者は前日餘課より外出を許す

一 下宿ハ其所管より證憑を以て願出つべし

一 總て生徒より申立事件ハ先ツ舎長ヨ差出し舎長之を斟酌シ
以テ教官ヨ質正スヘシ

附 大事件建議の時ハ此限ヨあらず

一 拜借の書籍ハ書籍出納所定則の通たるヘシ

一 舎中ヨて酒ト飲ムベからず

三月

大學

學課

一 毎科各上下二級ヨ分ツ生徒專ラ一科を攻め下級ヨり上級ヨ
進ヘシ科を混スル勿レ級を躡ル勿レ

一 毎科各講義一を設け其科ヨ入る者上下級を論せず必ず出テ
之を聴かしむ

一 毎科毎級各輪講一を設け其科其級ヨ在る者必ず出テ之を講
せしむ

一 教官一員毎ヨ生徒凡二十人を分配シ專ラ其教授を受しむ

附 聽講輪講等ヨて他の教官ヨ從ハ此限ヨ非ず

一 正課席毎科各一場を分占シ生徒必ず其場ヨ列シテ專科の書
を讀ヘシ教官も其場ヨ莅テ之を教授すヘシ

一 生徒の識力ヨ准シ教官斟酌シ各科書目の内ヨリ一書を撰テ
之を授ク其書業を卒レハ又一書を授ク生徒自ら撰を許さず

附 其書籍の卷數ヨ依リ卒業の遲速を稽ヘ其勸懲を督すヘ
シ

三月

大學

中小學規則
小學

子弟凡そ八歳よして小學よ入普通學を修して兼て大學專門五科の大意を知る

句讀 習字 算術 語學

地理學 五科大意

子弟凡そ十五歳よして小學の事訖り中學よ入る

中學

子弟凡そ十五歳よして小學の事訖り十六歳よ至り中學よ入り專門學を修む科目五あり大學五科と一般

子弟凡そ二十二歳よして中學の事訖乃ち其俊秀を撰ひ之を大

學よ貢す

〔太政官〕御布告 三月二日

先般惡金引替の道被爲立銀臺二分金の分ハ百兩よ付先金札三十兩よ御引替被成下追て總員數銘々持分巨細御取調の上猶御詮議の品も可有之自然畜置又ハ姦曲の所業於有之ハ當人ハ勿論地方官の可爲落度條去己年限引替候様同年十月中被仰出候處僻遠の地御布令遲達の向ハ未だ引替残りも有之其他銘々持分申立不行届の向も不少候よ付格別の譯を以期限後れの分も前同様御引替可相成條得其意己十月御布令の趣を以早々引替濟相成候様府藩縣よ於て可取計事

〔太政官〕御布告 三月四日

來十一日神祇官行幸よ付十日酉の刻より還幸よ至迄御神事候
事

但重輕服者并僧尼の輩參朝可憚事

〔太政官〕御布告 三月四日

來十一日神祇官へ行幸よ付諸官省勅任官同日辰半刻無遅々相
詰可申事

〔太政官〕御布告 三月五日

來十日以後

外櫻田 和田倉 馬場先 日比谷 數寄屋橋

鍛冶橋 吳服橋 常盤橋 神田橋 一橋

右十御門夜五つ時々切無印鑑通行不相成候よ付てハ先般御布

令相成候諸藩小印出來候迄ハ從前用來候藩印六拾枚宛來八日
迄よ兵部省へ差出可申事

〔太政官〕御布告 三月五日

外櫻田 和田倉 馬場先 日比谷 數寄屋橋

鍛冶橋 吳服橋 常盤橋 神田橋 一橋

右十御門夜五つ時々切後官員判任以下其餘士庶人無印鑑通行
不相成候事

〔太政官〕御沙汰 三月五日

民 部 省
大 藏 省

先般士卒祿制二十一等よ被相定候處更よ御詮議の筋有レ之十八

十九

等よ被_レ止候間此旨相達候事

但十三石未満の者ハ可_レ爲_二是迄の通_一事

〔太政官〕御沙汰 三月五日

兵 部 省

諸御門警戒兵規律別紙の通被_レ仰出候間此旨相達候事

諸御門警戒規律

一 〆切御門ハ別段達無_レ之てハ通行相禁置候事

一 外櫻田御門以下十門ハ暮六ツ時より〆切迄ハ番兵兩人宛門

側ヨ相立通行の者を譏察し夜中〆切後通行の者有_レ之節ハ兵

隊兩人門側迄出印鑑姓名等相糺候上通行の事

但夜五ツ時〆切ヨ就てハ〆切後無提灯通行一切禁止の事

欠

MISSING

一夜中御曲輪内出火の節ハ臺提燈等差出し開門通行爲致警戒
兵御門側ハ相立嚴重讞察可致事

但非常の節同斷の事

一遠國より兵隊又ハ早追等よて諸向へ夜中無印繼よて通行の
者ハ役名姓氏等ハ承_{うけたまは}れし人足帳或ハ印紙等取_られし通行可_レ爲_レ致
萬一疑_{うたが}儀有_レ之節ハ留置早速軍監へ届出可_レ受_レ差圖事

但印紙人足帳両様之内一ト通り所持の者ハ通行可_レ爲_レ致事
右の條々相守可_レ申事

〔太政官〕御沙汰 三月七日

水原縣

今般新潟縣被_レ復候よ付同縣へ被_レ移候事

但水原へハ接察使并本縣分局可ニ殘置事

〔太政官〕御沙汰 三月八日

京都府

今般格別の御詮議を以其府下人民産業基立金として五萬兩被下渡候間取計方行届候様御沙汰候事

〔太政官〕御布告 三月九日

驛遞の法一昨年助郷改正被仰出候處兵馬倉卒の際よて純然の整革よ至り兼追々驛郷の疾苦差迫り候趣よ付差向驛郷救助のため當分別紙の通譯法相定人足遣制限相立候條諸官員共御趣意奉體し旅行の節驛郷の難澁不相成様可心得候事
一今般驛法改正に付てハ二官六省其他諸局府藩縣の官員公事

旅行の節ハ諸道共官位相當表よ準じ人足遣制限相立候よ付別紙制限表の外入用有之節ハ都而相對貨錢たるべく事
一在職非役共旅行の節ハ公私ハ不^か拘^わ是迄定貨錢を以通行致來候處向後私用旅行定貨錢を以人足遣の儀都而廢止候事
一府藩縣官員從前其役所の印章を以人馬^{フカ}遣致候處向後都而人足帳へ驛遞司の印章を受通行可^レ致事
一東西京出立旅行の官員ハ兩京驛遞司よて印章受可^レ申事
一西京以西府藩縣の官員東行の節ハ大津驛迄其役所の印章を用ひ同所よて出張驛遞司の印章受可^レ申事
一品川驛以西府藩縣の官員西行の節ハ静岡驛迄其役所の印章を用ひ同所よて出張驛遞司の印章を受可^レ申事

一 大津驛以東府藩縣の官員東行の節ハ熱田驛迄其役所の印章を用ひ同所よて出張驛遞司の印章を受可申事

但東京以東北其外共出張驛遞司無之場所より出立の官員ハ其役所の印章を以制限の通人足遣致し驛遞司出張有之驛よ至り改受可申事

一 東西京大坂府往還の官員ハ必東海道通行可致事

一 此度驛法改正よ付てハ府藩縣よ於て驛遞掛の者相撰管内の驛々東海道ハ每驛一人宛中山道ハ二三驛よ一人其他諸道共行旅の多少よ應じ定詰の官員を差置毎事驛遞司の法則よ從ひ驛法取締可致事

但右出張官員の名前ハ兼而民部省へ可届出事

一 總て旅行の官員人足遣の印章驛遞司より受候よハ其者等級よ照準して相當の人足遣高を人足帳よ認入差出印章受可申事

但各地方驛遞司出張無之場所より發程の分も同斷の手續よ以其役所の驛遞掛より印章受可申事

一 總て旅行の官員驛遞司出張有之驛を經過候て同司檢印無之人足帳相用候者ハ定貨錢の繼立不相成事

一 行幸行啓等の節ハ人足遣方別段の御處置可有之事

一 非常出兵平時戍兵更番等通行の節人足遣の儀も前同斷の事

一 宿立人足定貨錢割増每驛地子免許並給米下渡其他驛路行旅取扱の儀ハ驛遞改正表郵傳規則の通たるへく事

一諸荷物量目改の儀ハ諸道貫目改所定則の通たるへく事
右の通驛法改正候條此段相達候事

午二月

太政官

人足遣制限表

公事旅行の官員定賃錢人足遣高制限

一第一二等 從一位正二位從二位相當

繼人足二十九人

此譯

長棒駕籠	一	挺	六	人
長持	三	掉	十五	人
兩掛笠籠	四	荷	八	人

一第三四等 正三位從三位相當

繼人足二十二人

此譯

長棒駕籠	一	挺	六	人
長持	二	掉	十	人
兩掛笠籠	三	荷	六	人

一第五六等 正四位從四位相當

繼人足十七人

此譯

長棒駕籠	一	挺	六	人
長持	一	掉	五	人

百

兩掛笠籠

三荷

六人

一第七八等

正五位從五位相當

繼人足十二人

此譯

切棒駕籠

一挺

四人

兩掛笠籠

四荷

八人

一第九十等

正六位從六位相當

繼人足十人

此譯

切棒駕籠

一挺

四人

兩掛笠籠

三荷

六人

一第十一十二等

正七位從七位相當

繼人足七人

此譯

垂駕籠

一挺

三人

兩掛

二荷

四人

一第十三十四等

正八位從八位相當

繼人足五人

此譯

垂駕籠

一挺

三人

兩掛

一荷

二人

一百

一第十五等

正九位從九位相當

繼人足無之

但御用の次第より寄二人より五八迄を許す

一第十六等 分三等

一等 二等 三等

繼人足無之

但御用の次第より寄二人迄を許す

一諸藩權小參事以下在職の者等級の追而御規則被仰出候迄當

分大中小藩の無差別第十二等より第十六等迄を以て藩々に

於て豫め等級相立人足遣の制限を照準して旅行可致事

一諸官省其他諸局府藩縣共等外勤仕の向旅行の繼人足無之云

とも格別遠方ならば別段の評議を以て分三等の例に従ふべ

き事

一皇族華族非役の向公事旅行の節ハ位階相當を以人足遣可致

事

一總て地方非役の者公事旅行の節未等級御規則も無之候間先

當分の處士族ハ第十二等より十五等卒十六の制限を以人足

遣可致事

一官員免職よて舊籍へ復歸の者家族引繼の節ハ公事旅行の振

合を以人足遣可致事

右の通相定候事

驛遞改正表

今殿驛法改正被仰出候より付差向東海道の分左の通相定候條

驛郷共勞逸無之様各地方官よ於て取締方可致事

一 一昨年従前の宿立人馬を廢し大中少路の驛々附屬村々組込驛郷合併申付置候處當三月晦日限更よ廢止の事

一 四月朔日より一驛人足百人定立申付候條正路よ相勤不足の分ハ驛場近方の村々よて當分相當の助郷申付候間平等よ觸當可申事

一 驛々人足賃錢當四月朔日より従前の十倍の上へ更よ二倍相増十二倍増と相定候事

但助郷人足の分ハ右十二倍の内十倍相渡殘二倍ハ驛々立人足助成よ被下候事

一 宿馬定賃錢當の儀當分被廢止候事

但商荷其外相對賃錢を以馬繼立候儀勝手次第且驛郷都合

二 寄雖御用物人足荷物を馬荷物よ振替候儀ハ不苦候事

一 馬荷物定賃錢を廢止都て人足遣と相成候上ハ人馬共相對雇の繼立有之節十二倍の割合を以適當の賃錢を不貪様驛遞掛の地方官よて取締可致事

一 従前下ヶ渡候驛々問屋飛脚給米被召上今般宿立人足申付候よ付地子ハ當分被差許外一驛米三十五石宛諸入費として給支候事

但佐屋路ハ拾八石宛給支候事

一 驛々取締の儀ハ向後地方の官員出張の管よ付是迄の取締役名目並苗字等差止候條以來元役と心得可申事

但取締役扶持ハ以來不被下候事

一先觸遠並見人足等宿立人足の内を以遣拂候儀ハ十人迄を差
操可取計事

一杖拂宿役人出迎其外總て馳走ケ間敷取扱無之様去々辰五月
被相觸置候處追々猥り相成候哉ハ相聞候間向後厚く相心

得屹度相守可申候事

右の通相定候事

諸道貫目改所定則

貫目改所驛名

東海道	品川	静岡	熱田	大津
中山道	板橋	追分	洗馬	

陸羽道中 千住 宇都宮

甲州道中 内藤新宿

以上

一貫目改所驛々ハ管轄地方の官員二人を暨晝夜一人宛相詰
諸荷物量目改方可致事

但東海道改所驛々ハ驛遞司の官員可立會事

一貫目換改の時限ハ卯の半刻より申の半刻迄の事

但急御用夜通し等の分ハ刻限ハ不拘事

一駕籠諸荷物共貫目の儀ハ官員出立の節人足一人持七貫目の
定を以其者遣高制限ハ照準し荷造いたし改請可申事

但驛遞司出張無之場所より出立の官員ハ其地方驛遞據

於て相改左の雛形此通り木札を附可申事

表

四寸

裏

11ヤ

人足何人何分持

何

一長棒駕籠

人足 六人

但駕籠目方手道具共合て貳拾四貫目を越へからず

一切棒駕籠

人足 四人

但駕籠目方手道具共合て拾貳貫目を越へからず

一垂駕籠

人足 三人

但駕籠目方手道具共合て六貫目を越へからず

一宿駕籠

人足 二人五分

一長持兩掛笠籠其外諸荷物者都て人足一人七貫目持の定よ付
七貫七百目者一人一分拾貫五百目者一人半拾四貫目ハ二人
の割合々々を以荷物の量目よ随ひ相定貫目改濟の札相渡可
申事

一貫目改請候後途中よて買求め候品あらハ其驛々よて貫目改
請其品の目方よ應し制限迄の人足遣よ候ハ、定賃錢たるハ
く目方制限を過候ハ、相對賃錢の事
一諸荷物貫目掛改の上過貫目相成候分ハ前改所又ハ其發程の
場所迄前條の撥合を以賃錢拂戻可致事
一諸道驛々傳馬所へ者秤相備置不相當よ見請候荷物ハ貫目掛
改可致事

一 駕籠並諸荷物共發程の節其地方驛遞掛よて付置候木札ハ改所よ於て改濟の節木札を引替可申事

一 通行の官員改所有之驛々へ止宿の節ハ掛改の定刻限よ不_レ拘翌日出立の節改請可_レ申事

一 貫目改所へ出張の宿役人ハ本陣或ハ旅館屋渡世致さ、る者を撰舉可_レ致事

一 諸荷物掛改の節宿主又ハ下男下女等改所へ立寄荷物取扱等致問敷事

右の通相定候事

郵傳規則

一 諸官省其他諸局府藩縣の官員公事旅行先觸の儀向後右先觸

紙中旅行官員の官名及姓名の等を記し制限よ従ひ人足遣具

休泊日付共認入奥書表紙共其局々々の名印を以發程の前日

相違なく差出可_レ申尤急御用ハ其時宜よ應ずへき事

但是迄先觸繪符等へ御用の文字認來候處以後官員の先觸

並所持の兩掛掉荷物の繪符等都て其役場又ハ其官名を記

し御用の文字認申問敷事

一夜通_レ繼者成の刻より寅の刻迄ハ定賃錢五割増の事

一 晝早追者定賃錢の倍增夜早追者二倍增の事

一 總て駕籠並諸荷物共割込候人足の儀ハ強弱よ隨ひ人員を不

可論事

一 警ハ拾四貫二人持定の兩掛一荷を一人よて持運ひ四人持

一十百

一 警ハ拾四貫二人持定の兩掛一荷を一人よて持運ひ四人持

の切棒駕籠を二人よて昇送候も人足の強壯よ寄て自由た
るへき事

一 驛々旅行繁く人足遣込合候節ハ通行の官員於ても聊斟酌を
加へ徒よ權威を以宿役人を置候様の所爲有之間敷事

一 宿駕籠の蒲團ハ有合の品を用候筈よ付強て善惡を不可論事

一 總て旅行の官員人足帳傳馬所へ差出候節改所の改濟又ハ其
官員の役所より差出候小札と引合せ人足差出可申事

右の通規則相定候事

〔太政官〕御 達

一 滿二年以上

勅任官

御直垂地 織紋

奏任官

同 無紋地

判任官

御晒御絹の内

外よ一ヶ月分官祿被下

歸國旅費ハ御定則の通被下尤家族引繼候分ハ其一倍被加下候

事

一 滿二年よ不至者ハ總て被下物無之之事

但十二月以上の者ハ一ヶ月官祿半分被下候事尤旅費ハ同上

の事

一滿四年以上ハ追て規則被_レ相立_レ候事
一滿四年ハ不至者ハ總て位階返上ノ事

〔太政官〕御布告 三月十日

明十一日神武天皇御祭典被_レ爲_レ行候_レ付行幸濟より申の刻迄奏任以上官員參拜可_レ爲_レ勝手候事

〔民部省〕御達 三月十日

關所物并過料捨物御拂代等去己年以來捕亡_二半_一内其他右類ノ入費_レ遣拂候様同年十月中申達置候處捕亡_二其外_一入費_レ引足兼候場所ハ租税の内より遣拂不都合の儀も有_レ之候_レ付當年以來右入費ハ總て第二常備金の内を以仕拂取揚物過料捨物等御拂代ハ御勘定組の儀相同上納の積可_レ取計候段更_レ相達候事

〔太政官〕御沙汰 三月十二日

大 學

是迄寮長の稱相改舎長と可_レ唱事

〔太政官〕御沙汰 三月十二日

民 部 省

東京及其他_レ有_レ之候函館會所是迄通商司請の處自今開拓使管轄_レ被_レ仰付候間此旨相達候事

〔太政官〕御布告 三月十三日

來十五日伊太利亞公使并英吉利水師提督參朝候間此旨相達候事

〔太政官〕御沙汰 三月十三日

東京及其他より有之候函館會所是迄通商司引請之處自今其管轄
より被仰付候事

〔太政官〕御布告 三月十四日

集議院開院被仰出候より付諸藩議員來る四月中可罷出事

〔太政官〕御達 三月十四日

昨年中差出候議員の内より藩政より預からざる者或は東京定住
藩廳の事務を不取扱者等有之趣右に藩論御採聽の御趣意貫徹
不致不都合の事より候此度議院御開相成候より付ては兼々被仰出
候通藩政向篤と相心得候者と選舉し藩論洞徹實地適用の儀事
相立候様厚く相心得可申事

〔太政官〕御沙汰 三月十四日

當年還幸の上大嘗會被爲執行候筈より候所東北綏撫の道未被爲
行届加之諸國凶荒奥羽より於ては皆無同様國用欠乏旁以不被爲
得止還幸御延引被仰出候間右の趣布告可致事

〔民部省〕御布告 三月十四日

牛馬賣買渡世の者住々不埒の取扱致し候哉の趣甚不都合の事
より候仍自今無鑑札よりて右渡世致し候儀決して不相成候間於地方
官別紙離形の通鑑札相製渡世のもの能々取糺候上下々渡追て
右名前通商司へ可届出事

但鑑札一枚より付爲冥加金三分ツ、年々取立六月限通商司へ

可相納候事

表

○ 庚午 民部省通商司
發行 牧牛馬懸の印

檜板
燒印裏
の事

○ 何 府 何郡何村
番號 縣 改 罷

〔太政官〕御沙汰 三月十七日

親王家よて用來候菊紋葉替又ハ裏表等品を替へ御紋よ不紛様可致旨先般御沙汰の通よ候條右紋付の品々社寺へ致寄附候儀堅禁止被仰出候事

〔太政官〕御沙汰 三月十七日

神 祇 官

今般北海道石狩國札幌郡よ於て開拓神鎮座よ付祭祀社務等の

儀從其官出張執行候様被仰出候事

〔太政官〕御沙汰 三月十七日

東 京 府

鐵道製造よ付東京より神奈川迄道筋測量被仰付御雇入外國人引連役々出張可致候條爲心得相達候事

〔太政官〕御布告 三月十九日

相州横須賀港よ於て修船場御取建有之よ付蒸氣船風帆船等修覆差加度者直よ可願出候事

〔太政官〕御沙汰 三月十九日

兵 部 省

品川縣支配地駒場野自今練兵場よ御定よ相成候條此段相達候

○

品川縣

其縣支配地 以下同上

〔太政官〕御沙汰 三月十九日

東京府

其府管轄外有之候諸邸宅上地自今各地縣々へ管轄被仰付候
條夫々引渡可申事

〔東京府〕 御 觸 三月廿日

近來時勢の改革より家業失なへるもの多く猶此儘よてハ活計
相立間敷と深く

御焦慮被爲在種々御救恤の道を被爲立候處猶又府下四民の婦

女は家業を授與の爲今般深川西平野町へ工場と唱へ機業稽
古場を被爲建候よ付自今士庶の差別なく十二三歳以上の婦女
紡績機織の業を學度ものハ工場へ稽古よ可罷出若遠方よて
日々往返難相成ものハ其次第よ寄り工場入稽古をも差許猶
稽古日數の多少よ不寄其業よ應し相當の賃錢相與へ可申且織
子抱入よも願度者ハ是又其業の功拙よ應し相當の給金を以抱
入可遣或ハ織子よ罷出度候ても厄分多よて罷兼候分ハ其次第
よ寄自分宅よて其業を稼候様よも取計可遣問銘々得其意工作
場へ罷出稽古致度ものハ別紙雛形の通名前書判紙へ認可願出
候最も織子抱入の外ハ通稽古入込稽古とも自分賄たるへく候
右ハ婦女子の其業よ有付活計の道と被爲立度御趣意候條重立

候者厚く相心得小前末々迄不_レ洩様能々可_二申達_一事

〔太政官〕御沙汰 三月廿二日

留守官

二條城自今其官管轄被_二仰付_一候事

〔太政官〕御布告 三月廿三日

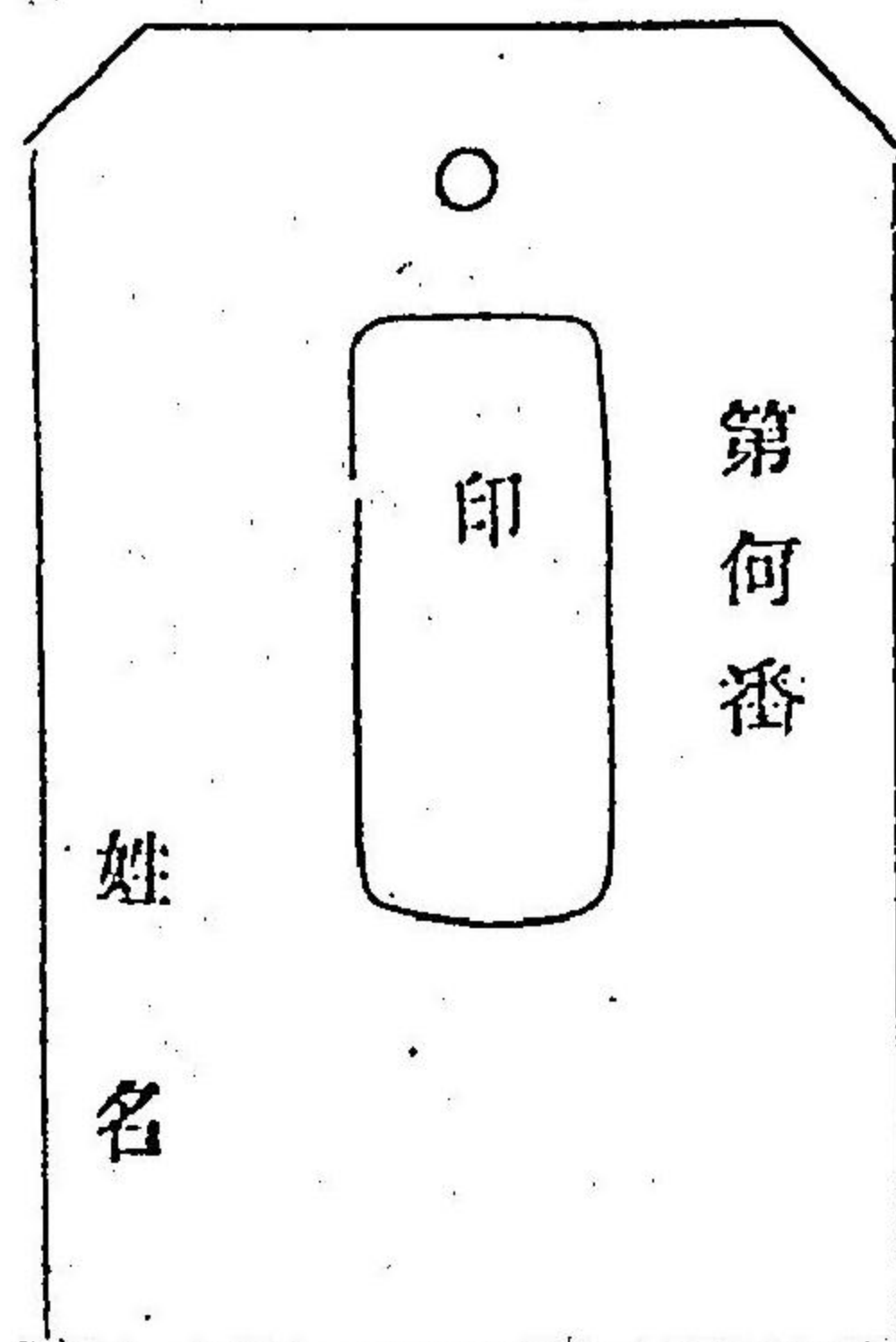
豎二寸八分



表

横二寸

裏



圖の通焼印有_レ之

往來者於道路離形の鑑札見當り候ハ、拾ひ取御郭内ハ諸御門御郭外ハ東京府兵隊屯所へ差出可_レ申事

○

御門鑑札御改渡相成候間來る廿八日より判任以下並諸官員及非役華族供廻り等人別所持出入共其番號番所へ相届可_レ申事

但供廻り一纏めよて出入の節ハ供頭より其番號を以主名相届通行不_レ苦候事

一諸職員へ御渡置の御門鑑札自今他官省へ轉職の輩ハ其度毎よ引換願出可_レ申他所在勤被_二仰付_一候輩ハ本官省へ差出し置免職の輩ハ其官省より取戻し返上可_レ致候事

一鑑札紛失或ハ燒失等致候節ハ其番數且次第柄等相記し御沙

汰伺出可申判任以下は於其官省兼て御規則の通致處置可届
出候事

但臨時よ御調可有之候事

○

御門鑑札御改渡相成候間諸藩公用人及舊官人其他共來る廿八
日より人別所持出入共其番號番所へ相届可申事

鑑札紛失或ハ燒失等致し候節ハ其番數且次第柄等相記し御沙
汰伺出可申候事

但書同上

〔太政官〕御沙汰 三月廿三日

徳川靜岡藩知事

其方祖先へ下賜候日月の錦旗奉還申立の趣被聞食候間返上可
致候事

〔太政官〕御布告 三月廿四日

有位華族參朝の節扣所迄提刀不苦候事

〔太政官〕御沙汰 三月廿四日

東京府

一橋田安兩家元家來兵隊の分ハ其府貫屬の儘兵部省支配被仰
付候事

〔太政官〕御布告 三月廿八日

五廿百
天台宗是迄比叡東叡日光三山よて管轄罷在候處今般東叡日光
三山ハ本山の名目被止總て比叡山管轄よ被仰付候事

〔太政官〕御沙汰 三月廿八日

宮内省

其省より内膳司被置候事

〔太政官〕御沙汰 三月廿八日

府藩縣

先般宣教使被爲設候より追々御施行可被爲在候間府藩縣
より於て可然人材一兩人撰擧致し出處姓名等詳より相記早々神祇
官へ可申出事

〔太政官〕御沙汰 三月廿九日

兵部省

軍曹の輩自今其稱被廢士族より被置東京府貫屬被仰付候間此旨

相達候事

○

東京府

今般軍曹の輩被廢士族より被置其府貫屬被仰付候事

〔民都省〕御布告 三月

府縣

各府縣諸藩御預所去已御取箇帳追々差出候處同年の儀ハ春來
不順氣よて田畑共出來劣貢米永とと相減候向多候ハ無餘儀次
第候得共荒地起返の有無並取下場地位立直の模様等ハ豊凶よ
不拘年々無油斷吟味可取計儀各職掌より付農隙見計夫々見分等
可致ハ勿論の儀尤年柄違作よて吟味より付起返より差出候反別青

立等の不熟くわくも相成候節ハ皆無引ひきも相立免上増まの分も出来方なりも寄候よてハ出来劣減せうげんも取計候故荒地取と下場等至當あたの吟味致いたし候儀ハ聚斂しゆれんの筋すぢもハ決かて無な之候處中ちゆうもハ心取違たがひの向むかひも有あ之候哉數百町歩ひゃくぢゆうほの荒地の内起返おこしの廉無かど之數万石まんにいしの支配地しはいちの内聊ちやうも免上増等無な之分相見候ハ如何いかんの事ことも付當午年ごんねん以來一際いざい念入吟味取計候様可べ致候一體連々いったいれんれん可べ起返おこし荒地の内川かひ關川かんがわ成等なり容易やすも難たがひ起返おこし分ぶんハ格別かくべつ其餘そのほかハ夫々吟味おひくの上起返おこしの年季ねんきを定引方相立可べ然筋ぜんぢんの處舊幕府中こきゅうまくふちゆうちゆうハ手餘荒地てのあまの外ほかハ年季引等ねんきひきもハ不な取計とけい向むかひも有あ之趣候得共年季無な之候得者箇所多かほの儀ぎも付自然吟味洩相成候分等ぶんらうも可べ有あ之哉や付向後むかうご荒地出来候節きりハ其度々年季ねんきを定引方申付且是迄引方相成居候荒地ちの分ぶんも夫々見分けんぶんの上容易やす難たがひ

起返見込おこしけんこの分ぶんハ拾ケ年じゆけねん又ハ拾五ケ年じゆごけねん程ほども年季ねんきを定置右年限ごねんげんも至起返おこし不な相成さうせい分ぶんハ繼年季つぎねんき申付候ハ、下民げみん難澁なんじやくの筋すぢも有あ之之間數其餘そのほか比ひ分ぶんハ場所ばうしよの厚薄こうはくも寄三ケ年よきさんけねん又ハ五ケ年ごけねん程ほども年季ねんきを定置起返方爲おこし取計とけい起返地おこしちの分ぶんも本免入ほんめんいり可べ相成さうせい年季ねんきを定取下申付年季中地所手入方厚世話致おこしし地味ちみの立直方たてちゆうほうも應おこしじ追々免上申付年限ねんげんに至候ハ、本免入相成候様吟味可べ有あ之候就つてハ各支配地荒地總寄仕譯おんきよしやく並取な下場總寄仕譯げばうおんきよしやく共別紙離形きべつしりけいの趣おもを以可べ成丈早々取調差出置夫々無な油斷吟味致いたし年々起返免上本免入等ねんねんおこしめんじやうほんめんいりらうもて増減まうげんの分ぶんハ内書外書等ないしょがいしょらうも記おこしし前年ぜんねんとの差引明細相分候様取調可べ差出候事

一去々辰年租稅御勘定帳突合^つ付米金納札并諸渡方伺濟の分
ハ其伺書本紙不^ニ伺濟分ハ受取證書取^ま纏め廉限一打書^ニ米金
員數納札何枚或ハ伺書何通證書何通と記し押印の目錄相添
差出可^レ申候尤去己年御勘定仕上の節より都て先般相達置候
規則の通相心得可^レ申候事

〔大藏省〕御達 三月

一官^ニ祿正米渡の廉代金^ニ直^シ候節ハ其所相場を以渡方取計候
筈の處格外米價^か下落致し不都合の場所も有^レ之趣^ハ付自然一
石に付金八兩の御定相場より下落致候ハ正米渡の分も八
兩相場よて相渡候様可^ニ取計事

〔太政官〕御沙汰 四月四日

兵 部 省

海軍所の儀於東京御取建御決議相成候條此旨相達候事
但陸軍所の儀ハ是迄の通大坂^ニ於て御取建^ニ相成候事

〔神祇官〕御布達 四月四日

諸官省二院大學彈正二職二使職員并宮非役華族宣教講義聽聞
勝手次第の事

但毎月二の日未の刻より申の刻迄講義の事

〔太政官〕御布告 四月五日

宣教使中正權大中少宣教使自今正權大中少博士と被改候事

〔太政官〕御布告 四月五日

今般開拓使職員中

監事 相當 正六位
權監事 相當 從六位

右の通被_レ置候事

〔太政官〕御布告 四月五日

癸丑以來天下有志の徒時事よ奔走力を國家よ效す者不少其成
敗得失素より多端といへども要するに忠誠義烈の事_{決て}溼_{減す}
へからず此節御記録編輯御用よ付其砌の日記手扣及書簡
等國事よ關係候分所持致候者ハ早々其筋へ差出可_レ申事

〔太政官〕御沙汰 四月五日

華族

御記録編輯御用よ付癸丑以來元關白議傳兩奏職事等相勤候向

ハ勿論總て家々の日記手扣及聞書よ至る迄國事よ關係候分早
々取調可_レ差出候様被_レ仰出候事

靜岡藩

御記録編輯御用よ付舊幕府日記文書類早々取調可_レ差出候事

諸藩

御記録編輯御用よ付癸丑以來舊幕府よて_{樞要}の職務相勤候向
ハ勿論總て藩々の日記文書類國事關係候分早々取調可_レ差出候事

〔辨官〕御達 四月五日

先般諸官員提燈印御定相成候處袖摺或ハ小丸等へも右印相用

候向も有之右よ銘々腰差而已よ限候儀よ付其餘ハ相用申間敷
此旨更よ相達候也

〔東京府〕御 達 四月五日

先般機業稽古の儀布告及ひ候處假令其業を覺候ても稽古所へ
不罷出候てハ稼の出來さる事と心得候て不勝手よ存候者も可
有之右ハ稽古の長短よよらず機業出來自宅よて其稼を致度も
のハ機具并織種をも相渡業を稼かせ候様致し遣し候儀よ付
此段猶小前末々へ不洩様可相達者也

〔東京府〕御 達 四月五日

士族卒

觸 頭

士族卒の輩より是迄受領地引替又ハ拜借地等願出有之候得共
先般祿制御定相成候上ハ其分よ應じ願可相濟筈の處去己年中
願書差出有之其儘不相濟分ハ當今よ至り却て事情齟齬致し候
哉も難計殊よ開墾其外よて變地も不少候處中よハ自儘勝手ハ
申立も有之又ハ事實大よ相違候願等多分よて右様冗亂致し候
てハ甚不相濟事ハ候依之去己年中より作四日迄追々差出有之
願書ノ分此度一般よ取消候間左の條理趁猶篤と熟慮の上再願
書差出すべく事

一 受領地引替ハ難相濟候事

但受領地身分不相當よて保兼候歟未引外歟又ハ御用地歟開
墾場等よ相成候歟或ハ前々より受領地よ住居不致全く外方

へ借地罷在候者ハ引替願可相濟候事

一願場所ヨ家作有之分ハ篤ト持主へ相對熟談を遂げ讓請候ハ
、雙方ヨリ願出べく若其儀難叶分ハ確證を添可差出示談不
整向ハ願不相濟候事

但更地の場所相願者ハ其旨可認入事

一家作有之無住の上地を引替地ヨ相願候向ハ地所のみ引替遣
シ家作ハ御拂下げ相成候事

但受領地御用よて家作共上地相成御手當等無之分ハ家作

共可被下候事

一元受領地無之拜借地相願候分ハ相當の地代可相納答の事

一郭内よて是迄家作地所共拜借相濟候分ハ御拂下げ相成候事

但一旦御郭内ヨ相成其後御郭外ヨ相成候場所も同前の事

一是迄追々願相濟候分よても格別不都合の向次第ヨ改正可有

之答の事

右の通相心得自今願の場所篤ト點檢の上不都合無之様願書寫

共美濃紙へ認圖面相添可申立候若此以後願面ト表裏の申立致

シ候族ハ急度可及沙汰候事

右の趣觸下の面々へ至急可相達候事

〔東京府〕

四月八日

下今井村新川口番所ヨ於て諸國物産積荷改候儀去己七月中諸
間屋共へ申渡置候處今般一ト先右場所へ切官員引拂候間追て
御沙汰有之候迄徒前の通心得通船可致旨右川筋産物川下致シ

候問屋共へ可申通事

〔太政官〕御布告 四月九日

諸官員拜借邸宅の儀自今拜命並免職の節々奏任官以上の當人判任以下へ其官省長官より東京府へ可相達候事

〔太政官〕御布告 四月十日

來る十五日於駒場野練兵天覽被仰出候事

〔太政官〕御布告 四月十日

諸藩隱居^御觀^親の面々御用濟^御付御暇を賜候勝手^御歸邑可致候猶東京在住致度輩へ其旨可願出事

〔太政官〕御達 四月十二日

今殿新貨弊御鑄造^御付藩々^御於て當今無用の銅製大炮所持致

し候へ、相當の代價を以て御買上げ^御相成候間東京眞崎鑄錢座へ申出早々廻^御し方可取計旨御達^御相成候處御都合^御より不^御及其儀旨更^御し御沙汰候事

〔太政官〕御達 四月十二日

是迄諸官省及府縣^御に至る迄官員勤方^御依り其長官限りの見込を以て褒美金等差遣候向^御も有之候處自今賞金等可遣儀有之候節^御其詮議振書取^御を以一應相伺候上可取計候事

〔太政官〕御達 四月十二日

華族麁香間祇候の面々自今中仕切御門迄乘輿乘馬被差許候事

但番所下坐^御不及事

〔太政官〕御布告 四月十三日

來る十五日於駒場野練兵天覽の處十六日御延引更被仰出候事

〔太政官〕御 達 四月十四日

中國四國九州

藩 縣

今般獨乙國公使軍艦よて來る十七日横濱出帆長崎へ罷越夫より九州中國四國等の諸港巡覽致度旨願出候よ付御聞届よ相成馬渡外務少丞同艦へ乗込罷越候間諸事不都合無之様打合取計可申候事

但し都合よより上陸致候儀も可有之此旨可相心得候事

和歌山藩

別紙〔前文〕の通よ付都合よより其藩管轄海岸へ罷越候儀も可有之此旨爲心得相達候事

名護屋藩

同文

〔東京府〕御 達 四月十四日

士族卒の面々御廓内よて從來自家作致し住居罷在候分邸宅手廣等よて保兼勝手の爲め祿高相應の邸と引替候儀不苦候よ付ては雖御廓内右様の類ハ邸中の家作可被下候併自儘よ取毀候ては場所よ寄り御體裁よも相拘り候間引替又ハ取壞し等の節

其時々伺出可申自然家作御用よ相成候得ハ御買上げ可相成候
御用無之場所は取毀し申付跡見苦敷無之様板塀取付置可申事
但拜借邸御預け邸并受領邸よても家作拜借の分ハ不ほんもん關ほんもん本ほんもん文ほんもん
候事

御廊内外共自家作の邸宅相對替等願雙方より同時よ可願出候
事

〔太政官〕御布告 四月廿日

寺院並府藩縣

從前の繪旨自今宣旨よ御改めよ相成候ハ付てハ諸寺官位任職
參内等諸願總て辨官へ可差出執奏有之向ハ執奏より可差出事

知恩院

別紙の通御沙汰相成候よ付てハ是迄兩局よて取扱候處自今直

よ辨官へ可差出事

〔太政官〕御沙汰 四月廿日

大學

臨幸被仰出候事

但日限ハ追て被仰出候事

兵部省

海軍天覽被仰出候事

但書同上

〔太政官〕御布告 四月廿二日

頒曆授時の儀ハ至重の典章てんしょうニ候處近來種々の類曆世上なつかれびとニ流布りゅうぷ

候趣無謂事しニ候自今弘曆者の外取扱候儀一切嚴禁被仰出候事

〔太政官〕御布告 四月廿二日

府藩縣官廳ニ於て將來未定の品物ト引當ひきあム致シ外國人より金銀借入の儀ハ決て不相成旨先般相達候就てハ是迄府藩縣ニ於て外國人より負債かさい有之分正金せいぎんニ於て借入又ハ品物買取かひニ付代金延拂其外共現金返濟殘り相成候分都て御取調ごとりしらべニ相成候條別帳べつちやうニ照準しょうじゆんシ借入候約條の始末引當の品類返濟の期月利息の割合及償却の目途共詳悉しやうしつニ認分ケ來る五月廿五日限り可差出候事
借財約條分類並償却目的

正金ト以て借入の分

通用金銀つうようきんぎん 何程なほ 弗な 兩りゆう 外國貨幣がくこくかへいト通用金銀つうようきんぎんト直ちか 但たゞせし分ハ其節の相場書明ちやうばいしやうめい 外國貨幣がくこくかへい 何程なほ 弗な 兩りゆう 其外各國通貨そのほかの各國のつうわう 細こまニ記入きりいスベシ

- 一 何年月日何譯を以て借入何年月日なにげんげつにちニ至り一時返濟歟又ハ月賦歟年賦歟又ハ何度なにどニ限り返濟歟の事
- 一 借用中利息何割何分かひ 但月何分たゞげつにち 歟 又ハ利付月賦返濟歟利付年何割歟
- 賦返濟歟の事
- 一月賦年賦其外等の約束やくそくニ相成る分借入後内金償却有之歟の事

- 一 右借入かひニ付引當品何々なになにニ於て何程又ハ何の利益歟何の譯わけニ於て收得しゆうとくスヘキ金錄歟の事

一期月よ至り品物よて返濟すへき歟正金よて返濟すへき歟の事

但外國貨幣よて借入よ相成る分ハ其品よて返濟すへき歟又ハ通用金銀歟又ハ品物歟の約條並よ相場定方の對談等^{有之}歟の事

一右借入よ付約條證書の寫^{ラシ}

但附錄明細書等有之ハ不殘寫取り相添へし

右金返濟の手當ハ引當面の通なる歟又ハ何品又ハ何の金又ハ何の利益を以て償却すへき旨借用高よ照したる^{目途}積り書

品物よて借入又ハ品物買入よ付代金借入の分

何品^{船砲銃}諸物品器械^{其外兵器}何程^{但各品}但各品廉譯を以て記入すへし

此代^{通用金銀}外國貨幣^{何程}何程^{弗兩}但直せし分ハ其節相場書^{其外各國通貨}明細よ記入すへし

一何年何月日何譯よて何の約條を以て借入又ハ何々の品何程何譯よ以て買取代金何程借入等の事

一右借入買取等よなりし品物詳細なる直段書

一右返濟の手續何年月日限一時償却歟月賦年賦歟其他利足の定等前條の廉書よ做ひ明細記入の事

一借財せし後内金償却有無の事

一引當の品類及期月償却の節品物よて返濟の管^歟正金よて返濟すへき歟の約條の事

一右借入よ付ての約條證書の寫^{但前同斷}

右金返済の手當借用高は照したる明細なる目途積り書前條正
の通借入高並返済目途共相違無之候也

年號千支月日

何
縣藩府

〔太政官〕御布告 四月廿三日

諸願伺届并往復書簡類自今千支書載可申事

〔太政官〕御布告 四月廿四日

種痘（種痘の儀）の儀ハ濟生の良法ハ候處僻陬（僻陬の地）の地ハ至てハ今以不相行向
も有之趣ハ付於府藩縣末々迄行届候様厚く世話可致事
但施行の法則等取調度向ハ大學種痘館へ申出傳習可致事

〔太政官〕御布告 四月廿九日

貨幣偽造の儀ハ元より嚴禁ハ候處國家紛擾（紛擾の際）於各藩徃々私
鑄し或ハ兵馬の費用と資け或ハ燒屑の急を救ひ無智の小民ハ
至てハ其流布（流布する）するを見て其嚴禁なるを忘れ終（終る）ハ其罪を犯候者
も不少趣全く御政令の未だ廣布せざるより右様立到り候ハ付
今般深き思食を以て去歲五月函館殘賊平定を期とし其以前犯
罪の者ハ已發覺未發覺已結正未結正を不問一切赦宥可致旨被
仰出候事

〔太政官〕御沙汰 四月廿九日

大少巡察自今權官を被置候事

彈正臺